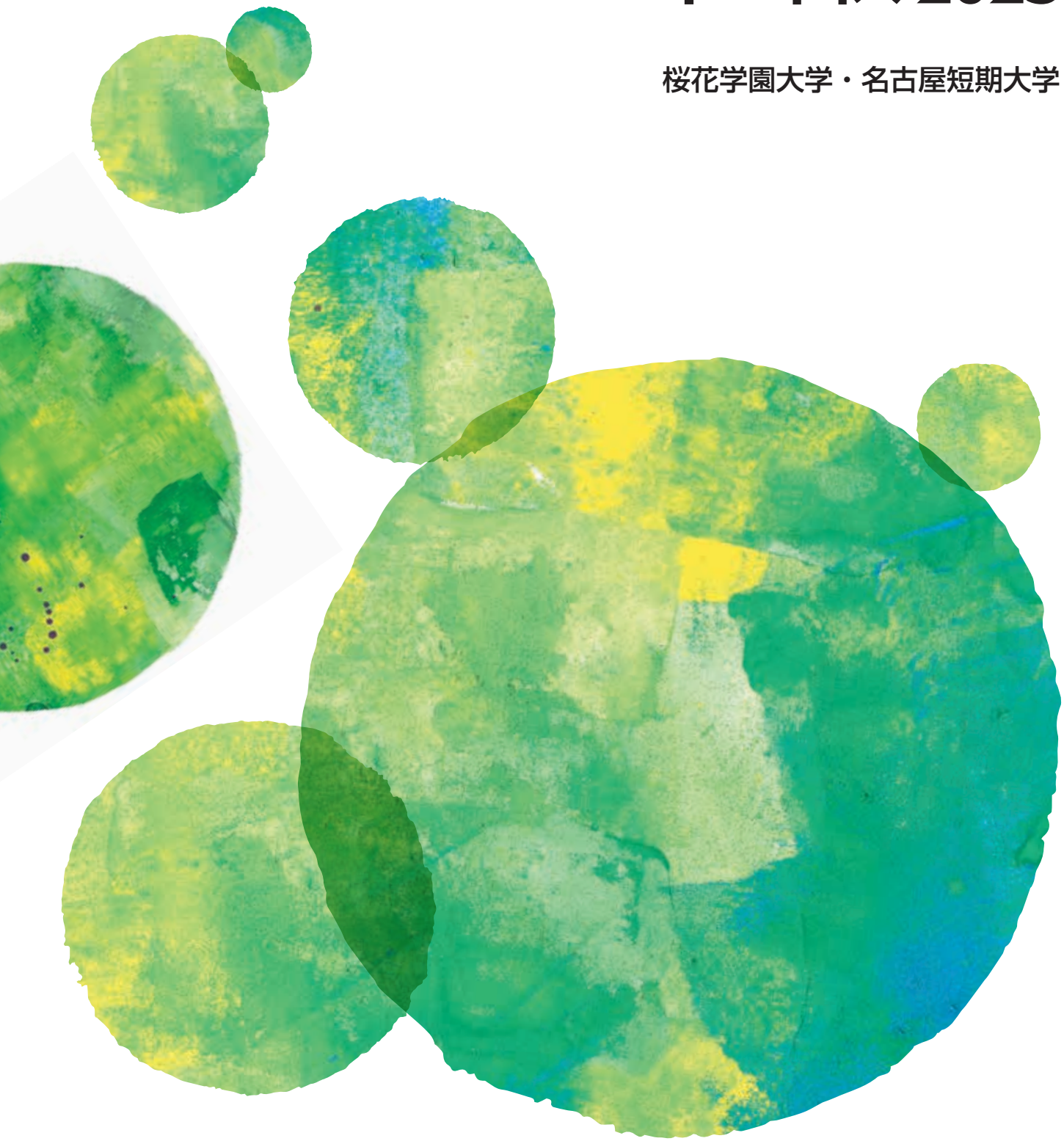
チャイルドエデュケア研究所

年報 2023

21号

桜花学園大学・名古屋短期大学



2023年度テーマ

「共主体性が育まれる保育――すべての子どもたちの幸せのために」

チャイルドエデュケア研究所機構図

目 的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業の推進
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業の推進
- 大学の教育研究の成果を地域社会に還元し、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与

研修・事業部門

■教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催

■教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業

〈夏季保育セミナー〉
- 卒業生支援

〈冬の講演会〉
- 地域へのリカレント教育

■目的達成のために必要な事業

〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
- 子育て交流会
- 支援室開放
- さくらんぼ通信の発行
- 子育て講座・親子講座
- 学生ボランティアの参加

研究部門

■研究所年報等の刊行物の発行

■国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学術交流

■外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究

〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

相談部門

■発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★３つの部門で７つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

目次

はじめに 【田端智美】 2

§１ 研究・実践報告

(1) すべての子どもたちが幸せに生きるための Co-Agency を考える
—『虐待被害者という勿れ』出版記念活動報告— 【嶋守さやか・田中ハル・樋口夏穂】 3

(2) 朝鮮幼稚園における食育の取り組み
—民族的アイデンティティの形成に向けて— 【内田将平・孔順南】 5

(3) 共主体性を意識した実習指導のあり方—学生の素朴な疑問や意見を大切にして—
【森山雅子・寺田恭子・田端智美・酒井久美子】 7

(4) コロナ禍における動画投稿によるピアノ実技指導について
—自学自習を深めさせるための工夫と課題— 【近藤茂之】 9

(5) 子どもの造形表現を活用した壁面装飾の可能性 【髙野真悟】 11

§２ 2023年度研修報告

(1) 夏季保育セミナー（報告） 【伊藤茂美】 13

(2) 冬の講演会（報告） 【武藤直子】 17

§３ 2023年度事業報告

(1) 子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのアンケート 【鬼頭弥生】 21

(2) 大学における子育て支援室の役割 【嶌田弘子・田端智美・近藤 愛】 23

2024年度事業計画、編集後記

はじめに

2023年度に入り、ようやくコロナも落ち着き始めました。WHO（世界保健機関）が「国際的に懸念されている公衆衛生上の緊急事態の宣言を終了する」と発表したのは５月のことです。この頃から子育て支援室「さくらんぼ」は、子ども・保護者の参加者が増えてきました。学生の参加も許可をしたので、賑やかな支援室になりました。ようやく皆がマスクをとることができて笑顔を確認できるようになりました。ウッドデッキで遊ぶ子どもたちを見てみると、車のおもちゃに乗って、パーキングに入れる遊びをしています。「２歳児さん、運転が上手だね」と、子どもも保護者も保育士も笑い合いました。笑い合えることは幸せです。この当たり前の幸せが長く長く続くようにと祈るばかりです。

さて、チャイルドエデュケア研究所は　①研修・事業部門　②研究部門　③相談部門の３部門で活動しています。本年度は「共主体性が育まれる保育―すべての子どもたちの幸せのために―」をテーマに、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生が共に学ぶセミナーや講演会等を開催しました。

研修・事業部門に関しては、夏にセミナー、冬に講演会を開催しました。夏に実施した、夏季保育セミナーでは「遊びを一緒に楽しもう」というテーマで、卒後１～３年の卒業生・保育者が集まりました。このセミナーには卒後10年程度のベテラン保育者も講師として参加し、実践的な保育について伝授していただきました。さまざまな年齢の保育者が、明日の保育で使える実践例を、子どもたちの幸せを想像しながら共有しました。また冬には、三木裕和先生をお招きして講演会「障害の重い子どものココロ―特別支援学校小学部の実践から―」を実施しました。たくさんの保育者・教諭が集まりました。楽しい中にも、少し悲しいエピソードもあり、皆、泣いたり笑ったりをしていました。子どもの幸せとはなにかを真剣に考える充実した時間でした。内容の詳細については、本年報にてご確認ください。

研究部門に関しては、本年報をご覧ください。実践報告として、(1) すべての子どもたちが幸せに生きるための Co-Agency を考える　(2) 朝鮮幼稚園における食育の取り組み　(3) 共主体性を意識した実習指導のあり方　(4) コロナ禍における動画投稿によるピアノ実技指導について　(5) 子どもの造形表現を活用した壁面装飾の可能性　の５つが掲載されています。これらを読むと、すべての子どもたちが幸せに生きるための活動の報告であると感じます。子どもたちだけでなく、学生や、かつて子どもだった大人たちを対象にした内容でもあります。

相談部門に関しては、大学における子育て支援室「さくらんぼ」にて年齢別交流会・開放日を実施しました。この子育て支援室「さくらんぼ」ですが、開設して20年が経ちました。日差しが燦々と入る支援室は、明るく、幸せの象徴のように感じます。また手作りおもちゃは子どもがゆったりと触れる場所においてあり、好きなおもちゃで遊ぶという主体性につながっています。のんびり暖かいこの場所には笑顔あふれる保育士がいて、いつでも相談できる場所となっています。2025年実施予定の政府「こども未来戦略会議」では「こども誰でも（保育園・幼稚園に）通園制度」を実施すると言っています。これはあくまでも筆者の希望ですが、子どもと保護者が一緒に通える子育て支援室こそ、子ども・保護者の誰でも通える場所になってほしいと感じます。そこで、育児に関する相談を共有し、誰もが子育てを楽しむようになってほしいと感じます。今年から子育てにおける相談を、より強化しています。特別なケースの場合は専門の大学教員につなげていきたいと考えていますので、ぜひ支援室が、誰でもが相談できる場となってほしいと考えます。

最後に、この年報が、当チャイルドエデュケア研究所に関わる保護者・子ども・保育者・学生の学びの機会となりますように願っています。

チャイルドエデュケア研究所　所長
田端　智美

すべての子どもたちが幸せに生きるためのCo-Agencyを考える『虐待被害者という勿れ』出版記念活動報告

嶋守さやか・田中ハル・樋口夏穂（保育学部保育学科・虐待サバイバー当事者）

キーワード：児童虐待　虐待サバイバー　主体性

はじめに

2023年10月、『虐待被害者という勿れ　虐待サバイバーという生き方』（新評論）を上梓した。その出版記念イベントとして、写真展『虐待被害者という勿れ』を開催した。以下、写真を担当した田中の写真展の開催の意図、虐待サバイバーとして田中の被写体、インタビュー対象者である樋口による写真展の所感と当事者としての声を発信する。最後に、書籍出版および記念イベント開催のCo-Agencyについて、「すべての子どもの幸せの実現」の視点で嶋守が考えたことを示す。執筆した箇所には括弧書きで担当者名を示した。執筆者各々の思いを伝えるためである。編集の際、文体をあえて統一しなかった点はご容赦願いたい。

写真展『虐待被害者という勿れ』に込めた思い（田中）

今、47歳です。虐待を受けていたと気がついたのはとても遅く、41歳でした。虐待されると多くの人たちが精神疾患や発達障害のような症状を抱え、生きづらい人生を送ります。自分も統合失調症です。モヤモヤとした生きづらさの理由は、自分の生い立ちでした。苦しさから解放され、児童虐待について調べました。虐待に苦しみ、人間関係を築けず社会から孤立する人がたくさんいる。自分も社会から孤立しかけていることに気がつきました。

自分に何かできることはないか。虐待サバイバー達が孤立しないようにするには、どうしたら良いか。虐待防止の発信活動をする今一生（こんいっしょう）さんに連絡し、「自分に何かできることはありますか？」と尋ねました。

「ハルさんが写真を撮る人なら、同じ虐待サバイバーの顔を載せた写真をホームページに載せて公開したら、サバイバーの勇気になるんじゃないか？」

今さんからのアドバイスから、虐待サバイバーの顔写真とメッセージをホームページに載せました。そして、自分がインターネット上で主催する「虐待サバイバー写真展」ができました。

虐待サバイバーを撮影することが、同じ虐待サバイバー達の勇気になると信じて始めた活動です。実際に会って話をし、ホームページに載せるために本人が書いた文章を読んで、自分が逆に勇気づけられるという経験の繰り返しでした。被写体の方も写真で自己を表現することで過去の虐待体験を自分と共有し、気持ちが解放されると聞きました。不思議で幸せな体験でした。

自分が必ず写す「手を差し出すポーズ」には、「孤立しないで、一緒に手を繋いで前に進もう」というメッセージを込めています。ファインダー越しに手を差し出してくれる被写体の方が、自分に向けて手を差し出している様でした。被写体の方の姿に、「共に前へ進んでいこう」と、自分が一番勇気づけられました。

今でもX（旧Twitter）には虐待サバイバー達の苦しみ、生きていくのが辛いという声が投稿されています。インターネットに繋がれない人も、苦しんでいます。「虐待サバイバー写真展」のメッセージが届くように、自分はホームページを本にしたいと思うようになりました。縁あって、世田谷にある就労継続支援B型作業所「ハーモニー」のオンラインミーティングで、嶋守さやかさんと出会いました。嶋守さんに虐待サバイバーの話をすると、「私が本にする！」と言ってくれました。

虐待サバイバー写真展の被写体の方達に再び声をかけ、インタビューには自分も撮影者として同行しました。再会した虐待サバイバー達はそれぞれに壮絶な虐待を経験し、それぞれの方法で逃れ、虐待サバイバー写真展と出会い、虐待を過去にしてきました。語弊があるといけないのですが、虐待を受けたサバイバーは虐待から逃れても、フラッシュバックで虐待を追体験します。親から離れても虐待が終わらない。大人になっても親の影響で、とても苦しい思いをしている人が多い。それでも「今、生きている」。苦しさは続いても、今を必死に生き、新しい体験をして虐待から距離を置いて幸せを感じ、それぞれの生き方をしています。そうして、「虐待を過去のものにしてきた」のです。

インタビューを受けることは過去を再び語ることであり、決して楽しいものではありません。それでも勇気を出して過去、今を語る虐待サバイバーは、嶋守さんと自分とが共に前に向いて歩くために語ってくれました。自分の人生を取り戻して生きることはとても難しくても前を向いて今を生きている虐待サバイバーたちの姿は、とても「美しい」と自分は感じました。

『虐待被害者という勿れ　虐待サバイバーという生き方』という本は、虐待サバイバーの生き方の一つのロールモデルを示してくれます。これからも自分は虐待サバイバーたちと共に手を繋いで、前を向いて歩いていこうと思っています。

虐待生還者【サバイバー】としての発信（樋口）

虐待被害を経験した人間は、心がそれ以上壊れないように殻に閉じこもるのが常だ。私は10歳で行政に保護をされてから田中ハルさんに出会うまで、虐待の経験を時折ツイートする程度で、反抗の刃を向ける先がわからずにいた。20歳ごろの話だ。

2018年、田中さんの「虐待サバイバー写真展、被写体募集」が Twitter（現X）のタイムラインに流れてきた。興味が湧いた。自らも虐待サバイバーだと語る田中さんの心の内を聴き、私も撮ってもらおう。そもそもサバイバーとは何なんだ、と。

待ち合わせた渋谷に現れたのは棘のない、柔らかな男性だった。お互いのこれまでを話し、共感した。出来上がった写真にはきっと友人たちがよく見ている、柔らかく自然な私が写っていた。

2022年、田中さんからの久しぶりの連絡で『虐待者被害者という勿れ』の書籍化企画への参加を引き受けた。オンライン写真展は取材で取り上げられていたが、その後の書籍化がうまくいかずもどかしさを感じていた。嶋守さやかさんはとてもよく話を聴いてくれ、私を褒めてくれた。知り合って日が浅い他人なのにとも感じたが、大きな愛を持って執筆していることが伝わった。

福岡、東京、名古屋で開催された10ヶ所のうち7ヶ所の写真展に私は顔を出し、その様子を自身の SNS で発信した。少しでも人の目に止まれば、と考えた。東京・世田谷区のハーモニーでの写真展は格別だった。本の他の章のサバイバーさんや、本以外のサバイバーさんもいらした。感極まり涙したほど嬉しかった。共に生き延びて、今、笑っているなんて未来を幼い私に想像できただろうか。一人ずつ握手をさせていただいたら余計に涙が溢れた。

写真展の開催と並行してラジオやテレビの取材があった。私の心の傷は、何年もかけて友人等に愛され他己修復をしてもらったものだ。だから今、喋ることが好きな私にしかできないスキルで嶋守さんと田中さんを応援しよう。福岡の FM 天神、東京では FM 立川、ふくろう FM、講演。NHK 名古屋のカメラの前では流石に後ろで組んだ手が震えた。私の使命だ、感謝行脚なのだと話をした。

虐待の被害者にクローズアップされることは少なく、報道は被虐児の死亡事件ばかりだ。成人して“元被虐児”となったサバイバーは、やり場のない怒り・悲しみをどう昇華すれば良いのか。そして、家庭内で重ねられた行為が虐待だと気づかず10年20年と歳を重ね、虐待サバイバーたちは孤独に苦しむ。虐待の話は過小評価されたり、いなされたりする。話を聴くのが難しければ、隣に座って寄り添う姿勢だけでも見せて欲しい。せめてそれが虐待から生還したサバイバーの私からの発信で伝われば、と考える。

『虐待被害者という勿れ』における Co-Agency（嶋守）

写真展『虐待被害者という勿れ』の撮影者である田中と、虐待サバイバーとしてのメッセージを発信する樋口の思いをここに掲載してきた。この写真展開催の意義を、「すべての子どもの幸せの実現」のための Co-Agency の視点からまとめておきたい。

「OECD Learning Compass 2030」(2019) には、OECD のより良い暮らし指標（Better Life Index）が示されている。仕事、収入、住宅という経済的要因と、ワーク・ライフ・バランスや教育、安全、生活の満足度、健康、市民活動、環境やコミュニティのような生活の質（Quality of life）に影響を与える11の要因とが個人、社会のウェルビーイングに関与することが示されている[1)]。

「VUCA」（不安定、不確実、複雑、曖昧）が急速に進展する世界に直面する今、教育の役割があるという[2)]。Co-Agency（共同エージェンシー）、「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」の育成が求められている[3)]。

得意だと感じられる表現方法があることへの自覚があれば、人は「自ら考え、主体的に行動し、責任をもって」声を上げることができる。上げられた声に共感が集まり、共主体的な社会変革がはじまる。教育が健康、人間関係、環境、言葉、表現という「人と人とが繋がる力」を授ける。今回の写真展の成功は、筆者らが発揮した Co-Agency と、いつでもどこででも「知ろうとする」人たちの Co-Agency とがあり、繋がることができたということによると筆者たちは確信している。社会的メディアへの橋渡しは、本学の塚本修さんの力だ。また、本書の挿絵は田端智美先生の作品である。ここで心から感謝申し上げたい。

文献

1）OECD ラーニングコンパス（学びの羅針盤）2030, p. 7

2）OECD Learning Framework 2030（2030年に向けた学習枠組み）中等教育資料 平成30年5月号、pp. 94-95

3）白井俊 , OECD における Agency に関する議論について , https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/142/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2019/01/28/1412759_2.pdf, 情報取得日2023/12/22

朝鮮幼稚園における食育の取り組み
民族的アイデンティティの形成に向けて

内田将平（桜花学園大学）　孔順南（名古屋朝鮮初級学校付属幼稚園）
キーワード：朝鮮幼稚園　民族教育　食育　アイデンティティの形成

1. はじめに

わが国における食育のあり方を示したものとして、厚生労働省が2021年に公表した「第４次食育推進基本計画」がある。そのなかでは食育の取り組み方針として、「我が国の未来を担う子供への食育の推進は、健全な心身と豊かな人間性を育んでいく基礎をなすものであり、子供の成長、発達に合わせた切れ目のない推進が重要である」[1)]と記述されている。さらに食育を展開する場として、幼稚園や保育所などの教育・保育施設が大きな役割を担うことが求められている。また幼稚園教育要領では、領域「健康」において食育に関する記述がなされており、「先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ」[2)]ことがねらいを達成するために指導する内容となっており、幼稚園における食育の充実が目指されている。

そして、こうした日本における食育の取り組みのあり方をめぐる先行研究を概観すれば多岐にわたっており、それらを系統的にレビューした研究もいくつか散見される[3), 4)]。他方でこれらの研究では、日本政府がいわゆる一条校として認める教育・保育施設における食育の実践や、近年議論の的となっている多文化共生の視点から、外国の背景を持つ子どもへの配慮を検討したものなどにとどまっている[5)]。こうした研究で対象となっている「子ども」は、「日本人の子ども」あるいは「ニューカマーの子ども」である。しかし、いわゆる「オールドカマー」として位置づけられている在日コリアンが通う朝鮮幼稚園の研究はあるものの[6)]、十分とは言い難く、本報告で扱う食育活動に注目した研究は管見の限り皆無である。

そこで本実践報告では、朝鮮幼稚園の食育の取り組み事例を報告することを目的とする。またその理解の前提として、朝鮮幼稚園の教育理念や教育目標といったカリキュラムの記述内容も整理する。最後に、朝鮮幼稚園の食育のあり方が、日本や諸外国でいわゆる「法律に定める学校」として規定されている幼稚園の取り組みとどのような点で異なるのか、その特徴や教育学的な意義を示す。

2. 朝鮮幼稚園の教育理念と教育目標

まず本項では、朝鮮幼稚園のカリキュラムの内容について、教育理念と教育目標に関する記述内容を抜粋して以下に示す[7)]。

まず朝鮮幼稚園の根幹たる理念は、「心身ともに健やかな子供を育て民族教育の基礎を築く」ことにある。具体的には、「朝鮮語（우리말、ウリマル）を使って過ごすことにより、自然に朝鮮語を習得し、歌や踊り行事など、民族文化を通じて民族心の芽生えに繋げること」が掲げられている。

こうした理念のもと、カリキュラムの中では、就学前までに身につけたい望ましい子どもの姿として「11の姿」が教育的な目標として掲げられている。ここでは紙面の関係上、今回の食育の取り組み事例に強く関連する箇所を３つ抜粋する。

1. 子供たちが朝鮮人（조선사람、チョソンサラム）としての自覚と自尊心を自然に持てるようにする。
2. 子供たちが園生活を通して自然にウリマルを習得できるようにする。
3. 子供たちが同胞や地域社会とかかわる中で社会生活への親近感や公共の情報に関心を持つようにする。

3. 朝鮮幼稚園における食育の取り組み事例

上記の内容を踏まえ、本項では、2023年７月に名古屋朝鮮幼稚園の年長クラス（女児３名と男児１名［男児欠席者１名］の合計５名）で行われた、サンチュを用いた食育の取り組み事例を紹介する。当日は、全体を通して60分ほどの実践であった。また当日のクラスは担任教員（主任）と補助教員の２人体制であった。

では今回の取り組み事例の中身について説明していく。まず教育の目的は、「①朝鮮民族の食文化に触れよう」「②食を五感で学ぼう」と２つ設定されていた。そしてその内容として、以下に示すように大きく４段階で進められていた。第１に、以前、園庭に植えた野菜が実ってきたお話をしたり、夏の時期に美味しく実る野菜について話し合ったりするなど、「①夏に収穫する野菜を知る」段階である。第２は「②サンチュを観察する」段階だが、同じ葉物野菜のレタスと比較しながら、その形状や収穫方法の違いなど、それぞれどういった点が異なるのかを話し合いをしたり、朝鮮の人たちが今も変わらず好んで食べている野菜の一つだということを学んだりする。この段階では合わせて、サンチュの食べ方についても学ぶ。続く第３段階では、先述

写真１　食育場面の様子

した教育目標の１と２に関連させて「③サンチュの手遊びをウリマルで行う」ことが設定されている[註1)]。最後に第４段階では、「④今も変わらず好んで食べられている朝鮮の食卓を作り、朝鮮民族の食文化に触れる」として、ズッキーニのチョン[註2)]を作ったり、キュウリのキムチを作ったりすることが展開される。この際の子どもたちの具体的な活動は、ズッキーニを切ったり、プチムカル(부침가루)[註3)]に卵を混ぜてホットプレートで焼いてひっくり返したりすることがあった。またキムチ作りでは、キュウリを切ったり、ヤンニョン(양념)[註4)]で和えたりなどの活動があった。こうした活動のなかで教員は、切るときの補助をしたり、ホットプレートの温度や取り扱い方などに注意を払っていたりしていた。

写真２　昔ながらの朝鮮の食卓を再現したお昼ご飯
(白米、蒸し豚、ズッキーニのチョン、タラのチョン、味付き卵、わかめスープ、サムジャン(韓国調味料)、キムチ、キュウリのキムチ、サンチュ、韓国のり)

4. おわりに

本実践報告では、朝鮮幼稚園のカリキュラムの内容にも触れつつ、朝鮮幼稚園の食育の取り組み事例を報告することを目的としていた。今回の食育活動では、夏に収穫する野菜を掲げながら、そのうえでそこに民族性も取り入れてサンチュをはじめとした朝鮮民族の伝統的な食文化をテーマとしているところに特徴があったと言える。そして、教員の教育的な意図として、朝鮮料理をただ食べるのではなく、子どもたちが五感を通して学べるように、各素材の特性も学び、直接触れ、匂いも嗅ぎ、さらに食べ方や料理方法などを体験しながら、朝鮮料理の食卓をつくりあげようとしていた。

以上の内容を踏まえて、今回取り組まれた食育活動の教育学的な意義は次のようにまとめることができる。つまり、“異国”で育つ子どもたちのアイデンティティの形成を身近な「食」というテーマからスタートさせ、昔ながらの朝鮮民族の食文化に触れながら、朝鮮の文化はもちろん、子どもたち自身のルーツを肯定的に知るきっかけとなっていることである。実際に、この実践の数日後に私(内田)が幼稚園を訪問すると、子どもたちが焼肉屋でサンチュを食べたことや、スーパーにキムチが売っていたことなどを嬉しそうに話す様子が垣間見ることができた。さらに、園のお友だちと輪になってサンチュの手遊びをして楽しむ様子も散見された。

最後に、現在もなお朝鮮幼稚園を含む朝鮮学校は様々な差別や暴力と対峙している。こうした中で、朝鮮学校がわが国において教育の多様性を取り戻すための「泉」の一つとするならば、今後も朝鮮学校の研究をおこなっていく意義は大いにあると考える[8)]。

註

1) 当日は次のような歌をうたっていた。「♪ サンチュ サンチュ サンチュ 豚肉とごはんにサムジャン サム サム サム！ ♪」
2) チジミのように焼くことをさす。
3) チョンを作る粉をさす。
4) キムチの素をさす。

引用文献

1) 厚生労働省（2021）「第４次食育推進基本計画」、p. 7。
2) 文部科学省（2017）「幼稚園教育要領」、p. 11。
3) 辻村明子・久保薫（2015）「保育所・幼稚園における食育実践に関する系統的レビュー」『青森中央短期大学研究紀要』第28巻、pp. 85–92。
4) 瀬浦崇博・川邊淳子（2021）「幼稚園・保育園における食育活動の有効性に関する文献レビュー」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第72巻第１号、pp. 347–353。
5) 大崎千秋・大森弘子・安里和晃（2018）「保育内容「人間関係」の講義に必要な外国にルーツがある子どもとの関わり方の留意点」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第40巻、pp. 237–250。
6) UCHIDA, Shohei (2023). How Kindergarten Teacher Acquire the Responsibility? : Focusing on Zainichi Korean Kindergarten in Japan. The 44th Conference of International Association of Childhood Education @Arsom Silp Institute of the Arts and Roong-Aroon School, Bangkhuntien, Bangkok, Thailand. Abstract book, pp. 73–76.
7) 名古屋初級学校付属朝鮮幼稚園（2023）「教育保育要領」。
8) 中村一成・金銘愛・陳聖華（2023）「【シンポジウム講演録】朝鮮学校と日本社会」『愛知県立大学　人間の尊厳と平和のための人文社会研究所　人文社会論叢』第２号、pp. 128–162。

共主体性を意識した実習指導のあり方
学生の素朴な疑問や意見を大切にして

森山雅子　寺田恭子　田端智美　酒井久美子（国際教養こども学科）
キーワード：教育実習　実習指導　共主体的な学び

はじめに

初めての保育、教育実習において学生が何を体験するかは、学生のその後の実習や就職、そして保育者としての将来の展望を見据えるうえで重要な要素である。金子[1)]は、保育実習生において１年生の観察実習の段階の実習環境がその後の実習を大きく規定することを示し、「実習の初期経験として、実習中のあらゆる経験が印象深く残りやすいと思われる」と述べている。初めて経験したことは、その人の学びの基礎になる。学生にとっての初めての実習において、何を主眼に置くか、どのような環境で実習に取り組ませるかは、学生の学びの系統性、将来への見通しにおいても重視しなければならないことであるといえる。

国際教養こども学科は、４年間で２回の海外留学を経験する。１年次の夏休みにニュージーランドへ２週間おおむね５日の保育実習、２年の終わりから11か月間オーストラリアにて約160時間以上の保育実習を実施している。学生が大学生になり初めて実施する実習がニュージーランドでの実習となる。ニュージーランドは保育の先進国であり、テ・ファーリキに基づいた「遊び中心の保育」、「環境を通した保育」が展開されている。また、子どもたちの学びを可視化し、ひとりひとりの成長を記したラーニング・ストーリーによるアセスメントについてもなされている。国際教養こども学科の学生は、初期経験としての実習がニュージーランドの実習であり、それをベースとして学生たちの保育観が形成されていくことは予想できるだろう。「遊びを中心とした保育」「環境を通した保育」「テ・ファーリキに基づいたラーニング・ストーリー」といった観点を学生たちの基礎として大切にしながら、どのようにその後の国内の実習や授業を展開していくかが本学科の大きな課題であるといえる。さて、上記の問題意識に基づき、2023年度より、本学科の特徴である海外留学を通した保育実習と国内での実習を連動させるため、実習の体系の見直し、改革を実施している。その第一歩として2023年度は、１年次の「教育実習入門」を見直し新しい実習教育及び実習形態に取り組んだ。

教育実習入門の変更３点

「教育実習入門」にて、見直した点は大きく３点である。第１に、実習園を「遊びを中心とした保育」「環境を通した保育」を展開している幼稚園・認定こども園に依頼し、理解を得られた園にて実習を実施した。第２に、実習日誌を、ラーニング・ストーリーに基づいた写真付き記録とし、保育全体を俯瞰する記録ではなく、子どもの遊びを通した学びを捉えるための記録に変更した。第３に、実習の授業を、一方向的な講義ではなく、学生の気づきや考えをもとにした授業形態に変更した。いわゆる今回のテーマである共主体性については、この授業形態の変化がそれにあたると考えられる。そこで本報告では、その新たな教育実習入門における授業の形態に焦点をしぼり、そのねらいや内容、授業の仕方、学生の反応について報告する。

共主体性とは、大豆生田は「子どもと大人の主体がバランスよく共存、融合している主体」「互いに学び、ともに成長しあう主体」と述べている[2)]。本授業では、学生自身の主体性と教員の主体性を伝えあうことを重視した授業を実施した。

「教育実習入門」のシラバス

表は2023年度実施した教育実習入門のシラバスである。グループワークを中核とし、ラーニング・ストーリーを実践しながら学べる内容を展開した。

表　2023年度実施した「教育実習入門」授業内容

		内　容
1	現在の幼児教育について考える（グループワーク） 「子ども主体の保育」とは（講義）	・現在の幼児教育について考える ・「子ども主体の保育」について学ぶ
2	実習について考える（グループワーク）	・実習についてのイメージや実体験をシェアする
3	実習について学ぶ（講義） ＮＺでの課題（ラーニング・ストーリー or 環境保育を記録する）の説明	・実習について学ぶ ・NZ の実習での課題の説明
4	ＮＺでの記録の発表①	・ＮＺでの記録を発表し、子ども理解を深める
5	ＮＺでの記録の発表② ラーニング・ストーリーの書き方を知る。（講義）→書き直す 実習の準備について	・ＮＺでの記録を発表し、子ども理解を深める ・ラーニング・ストーリーの書き方 ・実習準備について知る
6	ラーニング・ストーリーを書き直し、グループでシェアする 写真の撮り方について知る 事前訪問・実習のマナーについて知る	・アプリを用いて実習記録としてのラーニング・ストーリーの構成を知り、体験してみる
7	・直前指導 実習記録について 実習の諸注意 個人情報の取り扱い 事前訪問について（グループワーク）	・直前指導
8	事後指導① ラーニング・ストーリーを見てみよう	・ラーニング・ストーリーをシェアする。 ・幼稚園教育要領、⑤領域内容に照らし合わせてみる
9	事後指導② 次の実習の課題を整理しよう	・８回目の課題について発表しシェアする ・２年次の「教育実習Ⅰ」の自己課題を整理する

「実習の意義」に関する授業の展開

本報告では、２回目の「実習について考える」のグループワークにおける実践について紹介する。

２回目の授業では、始めにワークシートで以下の４つの質問がなされた。いずれも学習のポイントになぞらえた質問であった。学生たちは、自身の回答をワークシートにまとめた後、約４名からなるグループにてディスカッションをし、各グループからの意見が発表され、教員がそれをまとめた。

質問内容と学生の回答については下図１～４にまとめた。

①実習は何のために行うと考えますか。

- 子どもの様子や、先生の実際の動きを見て自分も実践して、現場の人にアドバイスをもらう。
- 保育者の仕事の想像と、実際の現実のギャップを知るため。
- 実際の場面で経験して、知識を得るため。
- 実際に現場に立った時に困らないようにするため。
- 学んだことを実践することで、勉強することだけではわからない感情を体験するため。
- 第三者からの目線での保育士の働きしか見れていない中で、実習するにあたって、いろいろな仕事や第三者からの目線ではわからないことがわかり、自分に向いているか理解できる。

図１　①の質問についての学生の回答まとめ

②医学や看護、学校の先生になるための実習と、保育所・幼稚園での実習の違いは？

- 面倒を見る相手の教養や知識の差。子どもは話しても通じないところがある。
- 医学や看護は、方法が全部決まっているが、保幼は、子どもがやりたいようにやらせて、見守っている。
- 保幼は年齢が決まっている。
- 医学や看護は、マニュアル通りにやっていればある程度できる。保育は、マニュアル通りにいかない。マニュアルはないわけではないが、思い通りにスムーズにいかないのが保育。

図２　②の質問についての学生の回答まとめ

③園によって保育や幼児教育が少しずつ異なっています。それは、なぜ？

- 何を目的としているか異なる。
- 園ごとに環境が異なる。強みが異なる。それを活かした保育をしている。
- 多種多様の社会にしていくためには、園によって違ったことをしたほうがよい。
- 地域などによって遊び方、気候が違い、それを活かした保育をしているので異なる。
- 子どもそれぞれに個性があるので、個性にあった園を選ぶため。

図３　③の質問についての学生の回答まとめ

④日本では実習生にたくさんのルールがあります。それはなぜ？

- 子どもの命を預かるため責任感を持つために必要。
- 実習生にとっては、非日常な実習だが、子どもや保育者にとっては日常なため、その違いを少なくして、子どもたちの生活のリズムを崩さないため。
- 実習生は保育者として、未熟だから、子どものケガなどにつながらないようにするため。
- 働いたときに、絶望を味わうことが少ないようにするため。

図４　④の質問についての学生の回答まとめ

学生たちの回答を概観するに、実習に対する意図やその背景について述べられているものがあった。①の質問については、保育の目線の重要性や、実践を通した学びについて書かれており、②の質問については、保育がマニュアル通りにいかない一回性の現象を学ぶための実習の重要さが語られている。③についても地域や文化などの背景による園文化の違いについて気づいている回答があった。④については、実習生にとっての非日常、子どもや保育者にとっての日常のなかでの実習のためのルールについての言及があった。これらの回答は、教員から説明されたものではなく、学生たち自身が自分の気づきや仲間とのディスカッションを通して導き出したものである。

当該回の学生の授業の感想では、「教育実習の意義について考えることができてよかった」「友だちの意見に納得することが多く学びになった」「みんなで意見を出し合い自分では思いつかないようなことも出ていたので理解が深まった」など、学生同士のディスカッションを通したことで「実習の意義」について受け身ではなく能動的な学びが深まったことが示されたといえる。

本回の授業のように、自身の考えが深まり、仲間の考えに触発され深化することにより、学生自身が実習に対して主体的に学ぶ姿勢を整えられ、意欲的に臨むことが期待される。また、主体性をもって実習に取り組むことこそが、子どもの姿を深く読み取ることにもつながり、ラーニング・ストーリーの記述の充実にも反映するだろう。今後も当該学生がどのような実習経験をしたか、記録を作成したか、学びを深めたかについて、経過を丁寧に検討することが重要であるといえる。

引用文献

1）金子智昭（2002）保育実習生のワーク・エンゲイジメントに関する研究―学年差踏まえた JD-R モデルの検討　応用心理学研究, 37, 45–61.

2）大豆生田啓友（監）おおえだけいこ（著）（2023）「子どもが中心の「共主体」の保育へ」　小学館

コロナ禍における動画投稿によるピアノ実技指導について
自学自習を深めさせるための工夫と課題

近藤茂之（名古屋短期大学 保育科）
キーワード：ピアノ　動画投稿　自学自習　ICT 教育

はじめに

2020年以降、世界を未曽有の混乱に陥らせた新型コロナ感染症は人々の生活スタイルを否応なく一変させた。教員は遠隔授業の準備に日夜追われ、自身も本学の ICT ツールを活用すべく、パソコンのキーを叩くことにまず専念し、思案の結果、過去に補習として試行的に実施したツール（当時は LINE アプリ）で演奏動画を送信し、教員が指導コメントを返信するという方法を応用することにした。本稿ではその実践を通して学生に自学自習を深めさせるための工夫と課題について述べる。

本学では休校となった2020年４～５月にかけて５回、その後県下の緊急事態宣言発出による再休校措置により７月末と12月末に１回ずつ、計７回の授業及び夏季休業中に補習として対面（面接）に相当する代替授業を実施した。

原則として学習管理用のｅラーニングプラットフォームである「ムードル」及び米マイクロソフト社の「Microsoft365」によるオンラインまたはオンデマンドの遠隔方法が推奨された。当初オンラインレッスンも検討したが、学生が有するネットワークや通信機器環境を調査した結果、回線の不備や不調また機器の容量等により直ちに安定的なオンライン通信の実施は困難なことが判明した。また１コマ90分の授業で１名の教員が最大８名の学生にレッスンを行うため、機器のセッティングや接続等にトラブルが発生した際に、ICT リテラシーの異なる学生や講師に対し時間的、技術的に対応をさせることは受講上の公平を欠く恐れがあると断念した。

そこで動画投稿による方法を模索し始めたわけだが、その理由として筆者が2018年11月にバイエル演奏を動画サイト（YouTube　バイエル　近藤　○番で検索可能）にアップロードしており、曲全体のイメージや具体的な奏法を聴覚、視覚の両面からサポートできると考えたためである。学生にはこれらを自学自習の参考資料として視聴することを推奨し、初心者には楽譜の読み方や容易な楽典知識を説明した複数の動画を別途作成し、基礎学習ができるよう整備した。これにより先の懸念は回避できたが、動画をムードル投稿する際にサーバーのアクセス集中や学生のスマートフォンの容量オーバー等が原因と思われるトラブルが一部あり、提出期限の変更を迫られたこともあった（その後、サーバー容量が改善されトラブルは徐々に解消されていった）。

授業を成立させるにあたり、そのエビデンスとして学生と教員相互による学習記録が必要と考え、共通ルールとして学生は投稿時に担当教員のページへ練習のポイントや質問を記入し、期日遵守で動画を投稿させることにした。

図１　受講生への連絡

まず学生は受講時限と担当教員のページをクリックし投稿する。教員は図１の通り個別のディスカッションを開くと、表示された投稿動画を視聴できる。

図２　学生とのやりとり画面

画角は特に規定しなかったが、鍵盤を俯瞰できることが理想的であるものの、三脚等の機材が必要となるため、左右の手指の動きが確認できれば良いことにした。結果的に学生は各自工夫してスマートフォンをセッティングしていたようである。演奏前には必ず自身の顔を画面に映し、学籍番号と氏名及び曲目を述べること、そして自身で練習に際して工夫したポイントや必要に応じて教員への質問事項を記載すること、また対面レッスンと同様に担当教員へ挨拶の礼儀を尽くすよう取り決めた。

図２は実際に筆者が学生とやりとりした際の画面である。当該学生はバイエル76番と78番の演奏を投稿したが、まずは

運指、リズム、テンポについて指導し、次回のレッスンへ向けて新たな指示をした。この曲でのレッスンは２回目であったが、当初より指に力が入ってしまって思うように指が動かないこと気にしていたため最後にそのことについて助言し、対面授業が再開された時にさらに詳細な指導をすることを約束した。当該学生とのやりとりは以下の通りである。

> 「〇〇さん、よく弾けていますが、76番は３小節目右手「レミファ♯ソラ」は指をくぐらせる必要はありません。78番は３小節目の指づかいを確認してください。楽譜に書いてある通り「５４１３２１５４２１」の指で弾きましょう。このパターンはこの他に2, 5, ６段目の各３小節目も同様です。(中略) バイエルは練習曲なので基本的にテンポは緩めない方がいいと思います (後略)

上記の形式でレッスンを行う上で、各担当講師に留意すべき点について事前に確認を行った。対面レッスンでは限られた時間で教員が学生の演奏を直感的に捉え、口頭で必要な指導を行う。しかし今回の方法では教員が指導の要点を文章化する必要がありそれが記録として残るため、内容が理解しやすいことは無論のこと、ハラスメントの観点からも学生が不快と受け止めることのないよう事前によく指導コメントの文言を推敲すること、そして感情的に陥ることなく必要な事柄にのみ絞ってするように指示した。その後６月に入り対面授業が開始された後、代替授業期間中における学生の満足度を把握するためアンケート調査を実施した。以下は一部抜粋した質問項目と回答のデータである。(n=232)

①バイエル１曲を提出できる状態に完了するまで、平均して何回くらい撮影を試みましたか？
　概ね１回 ４名 (２%)　平均２～３回 50名 (22%)
　平均４～６回 70名 (30%)　平均７～９回 18%
　平均10回以上 28%　その他 １%

②平均して撮影に要した時間はどのくらいでしたか？
　10分未満 29名 (１%)　10分以上20分未満 47名 (20%)
　20分以上30分未満 53名 (23%)
　30分以上60分未満 64名 (28%)　60分以上 36名 (16%)
　その他 ３名 (１%)

③教員からの指導コメントは理解できましたか？
　大変理解できた 59%　理解できた 33%
　まあまあ理解できた ７%　あまり理解できなかった １%

④筆者のバイエル動画 (YouTube) は視聴しましたか？
　毎回の練習で視聴した 165名 (71%)
　ほとんど視聴しなかった 46名 (20%)
　全く視聴しなかった 16名 (７%)

④で視聴した人は自分の練習に役立ちましたか？
　とても役に立った 73%　役に立った 25%
　まあまあ役に立った ３%

⑤代替授業による学習効果はどの程度ありましたか？
　とてもあった 28%　普通にあった 48%
　まあまああった 21%

⑥初心者のみなさんにとって、ムードルによる代替授業は満足できる方法でしたか？
　大変できた 14%　できた 39%　まあまあできた 39%
　あまりできなかった ８%　できなかった ０%

⑦経験者のみなさんにとって、ムードルによる代替授業は満足できる方法でしたか？
　大変できた 21%　できた 48%　まあまあできた 28%
　あまりできなかった ３%　できなかった １%

以上の結果から、代替授業が概ね学生に受け入れられたことが読み取れた。録画に相当な練習回数や時間を要したが、結果的に相応の力量を身につけたことが総じて学生の様子からも実感できた。動画投稿のメリットとして時間に拘束されず指導コメントを読み返しながら復習に励める。教員も指導内容を整理して明確に伝えることができる。特に初心者は困惑するのではないかと危惧したが、幸いにして本学学生のモチベーションの高さもあり、大きな問題は発生しなかったと受け止めている。

あれから３年が経過し、現在では対面授業を再開しているが、私の専門であるクラシック音楽の世界では予選演奏を動画提出させるコンクールが増えた。また県内の某自治体では録画実技試験と称し、今日においても受験者自身で課題曲演奏を指定サイトにアップロードする方法が採用されており、新たな“文化”が生まれた。

コロナ禍を機に世の中の価値観が一転したが、ことピアノレッスンに関しては対面指導に勝るものはないと捉えている。しかし一方ではその利便性を活かした ICT 教育の可能性について考える契機ともなった。今後も様々な指導のあり方について研究を進めていきたい。

※本稿は2021年度第19回日本音楽表現学会（ペガサス大会）における研究発表の内容に加筆再編したものである。続く2022年度第20回同学会 (ソナーレ大会) では「コロナ禍における動画投稿によるピアノ実技指導について②――教員作成の動画による指導実践の教育的効果と課題」を発表した。

子どもの造形表現を活用した壁面装飾の可能性

髙野真悟（名古屋短期大学）

キーワード：療養環境　アート活動　造形表現　壁面装飾

1　はじめに

病院や診療所などの環境では患者は病気や痛みなどの苦痛や不安を抱えながら施設を利用することが想定される。とりわけ子どもにとっては不慣れな環境で治療を受けねばならず、両親から引き離される場面もあり、時には痛みを伴う治療に耐えねばならない。また環境の影響を受けやすく、成人とは異なる環境整備が必要であると言われている[(1)]。家庭に近い環境を演出することや親しみやすい空間にすることは子どもやその家族の不安を軽減させるだけでなく、医療の質の向上にも寄与するといった報告もなされている[(2)]。

筆者は2011年より病院やクリニックなどで療養環境の向上を目的としたアート活動を行っている。本稿は呼吸器内科で行ったアート活動のうち、子どもの造形表現活動を壁面装飾に活用した事例であり、療養環境における子どもと共に行う壁面装飾の可能性を示唆することを目的としている。

2　活動概要

2023年３月に茨城県牛久市「ひたちの晴嵐呼吸器内科」（写真１）の開院に合わせてアート活動を導入した。医院は中学生から大人まで幅広い患者層と、子連れ世代の通院が見込まれるという。精神的な不調から病に罹患することもあり、少しでも快適な環境が患者の療養につながるという院長先生の強い思いがあり、名古屋市立大学鈴木研究室に依頼があった。同大学の学生10名と筆者が現地で７日間かけて活動を行い、筆者はデザインと制作、施工を担当した。

本活動の主な内容は屋外エントランス空間における動物彫刻の設置、１階キッズスペースの壁面ペイント、処置室の壁面と天井のペイント、CT室（写真２）・職員トイレ・階段室・職員休憩所・院長室の壁面ペイントである。壁面や天井のペイントにはプロジェクターを使用しデザイン画を投影しながら下書きをした後にアクリル絵の具を使用しペイント作業を行った。壁画は筆で描く方法とスポンジを使って押し付けるように描く方法と２種類で描いた。また、それらのペイントに加え壁面にカットしたベニヤ板に「ポーリングアート」の技法を用いて塗装したものを貼り付けた。ポーリングアートとは複数色混ぜ合わせた絵の具をたらし込むことで綺麗なマーブル模様を作り出す技法のことである。

本稿は前述の活動内容のうち院長先生のご子息Ａ（男６歳）・Ｂ（男３歳）が２種類の造形活動（ポーリングアート、壁面ペイント）を通して院長室の壁面装飾を行った内容の報告である。その活動の様子や半年後に行ったアンケートから、子ども参加型の壁面装飾の可能性を考察していきたい。

写真１　ひたちの晴嵐呼吸器内科

写真２　壁面ペイントの様子

3　ポーリングアートによる壁面装飾

丸く切り抜いた様々な大きさのベニヤ板に両面テープで取手をつけたものをキャンバスとして、ポーリングアートを子どもＡＢとそのご家族３名に体験してもらった。出来上がった作品（図１、写真３）は院長室の壁面に貼り付け惑星のイメージの装飾となった。ポーリングアートの絵の具はアクリル絵の具と洗濯糊を１：１で混合したものである。粘性を増すことで色が混ざりにくく絵の具が流れ落ちにくいのが特徴である。参加者は順番にポーリングアートを行い、子どもたちは何度も繰り返し楽しむ様子が見られた（図１、写真４）。

参加者の作品は十分に乾燥させて、院長室の壁面に両面テープとボンドで貼り付け、宇宙の中の惑星に見立てた。

「ポーリングアートで惑星を描く」

参加者：Ａ（６歳）、Ｂ（３歳）、ご家族３名
方　法：ポーリングアートでベニヤ板にアクリル絵の具をたらし込む
道　具：ビニール手袋、紙コップ、アクリル絵の具、洗濯糊、ベニヤ板
時　間：約１時間
子どもの様子：
「好きな色を５つぐらい選んでね」というと、Ａはペットボトルの中の絵の具の好きな色を選んで勢いよくボトルを振る。「上手に振るね」というと得意げにさらに振る。Ｂも真似して大きいペットボトルを選んで振る。５種類の絵の具を選んだら、筆者が絵の具と洗濯糊を紙コップに入れる。割り箸を使ってＡとＢが紙コップに中の絵の具をかき混ぜる。手に絵の具が付かないように手袋を勧めたらＡが手袋をはめる。
Ｂも手袋をはめるが少し大きいようであった。
筆者が見本を見せると、Ａが「僕もやる」と言ってすぐにやり始める。Ｂは「手が汚れるからやらない」と言う。Ａが紙コップの上にベニヤ板を乗せ、ひっくり返してベニヤ板の上に絵の具をたらし込む。綺麗な模様ができると「おーー」と言って驚く。混ざった絵の具が全体に行き渡るようにベニヤ板を傾ける。
Ａは１つ完成させるとすぐさま「もう一つやりたい」と次のベニヤ板を取りに行く。
Ｂも周りの家族に勧められて渋々やるが、手が汚れるのが嫌だと言ってすぐにやめてしまう。家族も一つずつ体験する。Ａは何度もたらし込みを行い、手つきも慣れてくる。十分楽しんだ様子だったので「そろそろ終わりにしようか？」と問いかける。みんなでできた作品を眺める。

図１　ポーリングアートの活動の記録

写真３　出来上がった作品

写真４ 子どもが取組む様子

活動の様子から、ポーリングアートは準備や環境を整えれば３歳から大人まで楽しむことができた。ただし絵の具を多く使うので汚れても良い格好や、絵の具を垂らしても良い環境を作ることが求められる。また、手を汚したくない子どももいるので手袋を用意するか、一緒に行うなどして援助する必要があった。加えて持ち手を工夫することでさらに活動がし易くなると感じた。作成した作品が壁面に飾られると、子どもが満足げに喜ぶ姿が見られた。思ってもいない色の混ざる様子、作品を一緒に作る経験と飾られた環境を通して、活動への満足感と院長室に愛着と親しみ持っていただいたようであった。

4　スポンジによる壁面ペイント

院長室の壁面のある一部の領域に円形の塗装部分を設定し、マスキングテープで円形の領域を囲い、その内側にスポンジを利用して子どもA、Bに好きな色のアクリル絵の具で自由にペイントしてもらった。この壁面は宇宙をテーマにしており円形の領域は地球をイメージしていることを事前に子どもたちに伝えた。

「スポンジで地球を描く」

参加者：A（6歳）、B（3歳）
方　法：マスキングテープの内側をスポンジで自由に描く
道　具：ビニール手袋、紙コップ、アクリル絵の具、筆、スポンジ
時　間：約1時間（途中休憩含む）
子どもの様子：
説明をするとAは、早くやりたくてうずうずしている様子。
Aが手袋を片手にはめるとBはAの様子を見て、手袋をはめたがる。
まずはAが好きな色を選んで(緑色) スポンジに染み込ませ、塗ってみる。
次に白、紫と色々な色を試す。Bが手についた絵の具を嫌がる。Bはしばらくお絵描き休憩。ウエスでBの手を拭いてあげるが気になっている様子。
Aがピンクでうんちと書く。うんちの文字を自ら緑の絵の具で消す。
スポンジを投げて描く方法をあみだすがマスキングテープの外に絵の具がついてしまう。
「ロケットみたいだねー」と筆者がついてしまったシミをロケットに見立てる。
後で炎を描こうねとBと約束する。
Aがロケットの話に触発されロケットを描こうと画面いっぱいに窓を描く。
Aは手袋を外す。
Bも手袋なしで描き始める。Bがピンクを描いたので、「今咲いている桜を描いているのかな？」と聞くと「桜を描く！」と沢山桜を書き出す。
ロケットの窓と桜のせめぎ合いが始まるがAが一歩引き、桜を一緒に描き始める。
Bもロケットを描きたがったので、スポンジでロケットを描く。
Aが指で直接スタンプのように点々を打ち出す。
「手形をつくったら？」と声をかけると、喜んで手形を入れる。
Aは手を自分の服でふく。服が絵の具だらけになる。
Bも手形をつける。Bも自分の手が絵の具だらけになっているが、最初よりは気にしなくなっている。
活動に飽きかけているようだったので「そろそろ終わりにしよっか」と声かけると、「まだ～」と答える。しばらく描いたあと、Aが足で絵の具を塗り始める。「サインを描いたら？」と勧めるとAは筆で自分の名前を書く。
「そろそろ完成にしようか？」と声がけするとAが「完成！」と言う。
絵の具が塗装範囲外に飛び出してできたロケットのような形に筆者が炎を入れる。
マスキングテープを外して完成。

図２　壁面ペイントの活動の記録

写真５　壁画に取り組む様子

写真６　完成を喜ぶ様子

大きな壁面に自由に絵を描くことは、子どもにとって楽しい活動であったようだった（写真５，６）。汚れても良い服装で思い切り画面に好きな色を塗り、とりわけBは手が汚れることも気にならなくなり夢中で色を塗る経験は貴重であったと予想できる。はみ出してしまった絵の具も咄嗟の機転でロケットに見立てることができ、「見るたびに、皆さん・わが子と一緒にアートに参加させて頂いた日を思い出して楽しい気持ちになる」とご意見をいただいた。

5　まとめと考察

今回は院長のご子息と家族の造形活動を壁面装飾に活用した事例であった。ポーリングアートとスポンジや身体による描画の表現活動を通して親子で楽しむ様子やイメージを膨らませながら絵の具を塗る様子が見られた。アンケートから院長先生、ご子息ＡＢとご家族の満足度も高かったことが明らかとなり、子どもと共に行う表現活動を壁面装飾に活用することは、楽しかった記憶と共に保存され、唯一無二の愛着の持てる空間の創出に有効であることが示された。

今後、このような活動は医療施設のエントランスや待合いなどの共用スペース、病棟など広く展開が見込まれる一方で、保育施設や児童養護施設などの子どもに関連する施設での普段の造形活動、竣工記念や創立記念などの特別な活動の展開など幅広い可能性が見込まれる。

参考文献

(1) 岡庭純子：病院における子どもの療養環境デザインに関する研究：インテリアデザインの実態と評価，名古屋市立大学博士（芸術工学）甲第1544号2016-03-25
(2) 山田あすか，村川真紀：児童精神科病棟における療養のための環境づくり指標に関する研究　児童精神科病棟の療養環境の向上のための研究 その１，日本建築学会計画系論文集（674）749-758, 2012-04

夏季保育セミナー（報告）　遊びを一緒に楽しもう

報告者：桜花学園大学保育学科　伊藤茂美

名古屋短期大学・桜花学園大学保育学部を卒業した若手保育者を対象とした本年度の夏季保育セミナーを７月２日（日）10：00～11：30に開催しました。

本年度の研究所のテーマは「共主体性が育まれる保育―全ての子どもたちの幸せのために―」です。さらに、夏季保育セミナーのテーマを「遊びを一緒に楽しもう」としました。若手保育者の心が安定し子どもと楽しく生活や遊びを繰り広げていけるよう、５つのブースを作り希望のブースで楽しみました。ブースのリーダーは、卒業生で経験豊富な先輩保育者に担っていただき、若手保育者と共に「遊びを一緒に楽しもう」を進めました。

会場は、今年度新しく増設された８号館１階のガラス張りのオープンスペースで開催し、どのブースも見渡すことができ、開放感に溢れていました。

ブースに分かれる前に、所長のあいさつ、今年度赴任した教員の紹介をしました。

その後、ブースに分かれ、遊びを一緒に楽しみました。先輩保育者と一緒に来てくださったお子さんも若手保育者に混じって遊び、温かい和やかな雰囲気の中、あっという間の時間でした。

① 触れ合って遊ぼう

ベテラン保育士の先輩からわらべうた遊びの実践の仕方、ポイントを教えていただきました。

経験年数の浅い保育士さんたちは、最初、乳児クラスでの遊びのレパートリーが少ないのでレパートリーを増やしたいという思いだけで参加されたようですが、先輩に「なぜ、子どもが気に入っているわらべうた遊びをやめて、新しいわらべうたを取り入れるのか」、「ねらいはなに？」などの質問を受け、考え込み出しました。これをきっかけに様々な質問が経験年数の浅い保育士さんたちから挙がり、わらべうた遊びの捉え方について先輩保育士からお話を伺うことに至りました。

また、そもそも触れられるのを嫌がる子にはどうやってわらべうた遊びを行えばよいのか、という質問も出ました。わらべうた遊びは全員に必ず行わねばならないものではないので無理に行う必要はなく、１つのわらべうたをその通りに全部歌う必要もないことをお話しいただいたうえで、一部だけ歌いながらその子のほっぺにちょんちょんと触って、その子が触れられることに慣れていけばよいと教えていただいたことで、経験年数の浅い保育士さんたちはほっとしていました。

わらべうた遊びを通して、子どもとの関わり方のコツやきっかけづくり、遊びの捉え方についてだけでなく、その他の悩み事もみんなで共有し合うことができ、楽しく穏やかなひと時を過ごすことができたようです。

② 触って遊ぼう

新任教員の髙野先生、髙野ゼミ１年の学生がアシスタント、名古屋市の先輩保育士２名と一緒に感触遊びを楽しみました。感触遊びは、主に低年齢児が楽しむ遊びとして、以前、園に勤務していた頃は、小麦粉粘土を子どもの前で作ると、子どもたちはワクワクしながら見ていた経験があります。出来上がると、保育者と一緒に手でこねたり、ちぎったりして遊びました。最近では、アレルギー児への対応として、小麦粉ではなく米粉を使うなど工夫がされています。また、感触遊びとし

て、寒天等を使うこともあります。今回は、米粉、小麦粉を使ってみました。参加した卒業生たちは、ほとんど初めての経験でした。７月の計画に入っている！と言っていた方もいました。低年齢の担当をしている参加者がほとんどでしたので、参考になったという声もありました。米粉粘土は、身近な素材を使って遊ぶことができ、作るからこそ、硬さや色等も調整できます。粘土遊びは自分を表現できる遊びでもあります。「触ってみる」ことにドキドキ感やワクワク感を感じながら、一人で黙々と楽しんだり、保育者や友達と一緒に遊んだりできます。今回は、紙皿に米粉や油、塩、水を入れて自分で作ってみました。作りながら、先輩保育者に話を聞いていただいたり、お世話になった教員との再会を楽しんだりすることができました。話しながらも手はしっかり動かして、さすが保育者です！ ハンバーグやウサギ、バラの花にシュウマイ…いろいろなものができました。「保育は、こうでなければならないことなんてないよ、粘土と同じでどんな風にでもなるから面白いんだよ、大丈夫！」とエールをもらい「明日からの保育、頑張れる！」と言っていました。

③ 作って遊ぼう

先輩保育者４名が参加してくれました。彼女らは、田端ゼミの１期生です。保育者になって12年目を迎えます。今回は、子どもを伴っての参加でした。子どもたちも、紙コップ人形を作って楽しみました。

最初に先輩保育者の自己紹介がありました。その後、ストローを使った動く紙コップ人形を制作しました。「ストローを切って、セロテープで巻いて……」と説明していると、参加した卒業生から「これなら５歳児もできるね」という声も上がっていました。自身が制作する時も、子どものことを考えながらしているということは、学生時代にはなかったことです。一人前の保育者に近づきつつあると感心しました。

その後、コップに穴を開けて、ストローを差し込み、組み立てました。顔と手を描いて、紙コップに貼り付けて完成です。

今回は、作るだけでなく実践に役立てることを目的としています。おおよその卒業生が０～２歳児担当ということで、先輩保育者に実践方法を伝授していただきました。私は「いないいないバァ」をすることしか考え付かなかったのですが、先輩保育者は10年を超えたベテランだけあって「紙コップ人形の手を顔の後ろへ持っていって、誰かな？誰かな？と言って耳だけ出すと、１歳児向けのクイズになりますね」「給食の準備の時、一緒に準備して、いただきますの挨拶の時使うといいですね」というように、子どもと一緒に楽しむ方法を伝えていました。その後の模擬保育の場では、卒業生同士で、子どもと楽しむ方法を考えました。学生の頃にも、模擬保育の授業はたくさんあったかと思いますが、保育者となった今では、取り組む姿も真剣です。先輩保育者にもたくさん質問ができていました。

最後に、卒業生の顔を見てみると、先輩保育者に明日すぐ使える実践を教えてもらって、明日からまた頑張ろうという気持ちになったからなのか、非常に明るい顔をしていました。制作をした紙コップ人形を動かしながら、日々の保育について語り合う場が必要であることを確認しました。

④ 体を使って遊ぼう

先輩保育士２名が遊びの進行を行い、音楽に合わせた遊戯を楽しみました。

自己紹介のあと、「この時期に夏祭りを行う幼稚園、保育園が多いと思いますので、盆踊りから始めたいと思います」という先輩保育士の声かけで「体を使って遊ぼう」が始まりました。

１曲目は『エビカニクス音頭』。先輩保育士が手作りしたエビとカニの手袋（不織布製）を手にはめ「エビ～♪カニ～♪エ

夏季保育セミナー

ビカニエビカニ♪♪♪」という歌に合わせて踊りました。楽しい気持ちが自然にこぼれ出し、隊形だけでなく、参加者皆の心もひとつの輪になっているようでした。続けて、盆踊り『子どもソーラン音頭』を踊り、そのあとは体操・遊戯と続きました。

先輩保育士が持つレパートリーの中で、子どもに人気があったという『ラーメン体操』『昆虫太極拳』『しゅりけんにんじゃ』『バナナくんたいそう』などを紹介してもらい、一緒に踊って楽しんだ。参加者から「これ知ってる、うちの園でもやってる」という声が聞かれ、日々、保育者としてがんばって保育に取組んでいることがわかりました。

また、遊びの展開について『おやつたーべよ』の曲を例に、先輩保育士から「子どもの好きな食べ物を聞いて、どんどんアレンジしていけるよ」と教えてもらいました。実際に「あなたの好きな食べ物は？」との先輩保育士からの質問に「焼肉」と答えたやりとりから、焼肉の振り付けを考える遊びも体験しました。

ハプニングからの学びもありました。曲の途中で「あれ？（振り付けを）忘れちゃった。誰か知っている人いませんか？」と先輩保育士。すると、誰からとなく「（振り付けを）作っちゃおう」「適当に踊ればいいんじゃない」との言葉が発せられ、歌詞に合わせて踊る即興振り付け遊びに発展したのです。皆で互いを見ながら踊り、面白さ、可笑しさを感じ合い、顔を見合わせて大笑いしていました。この予定にはなかった即興振り付け遊びを受けて、先輩保育士から「保育って、こうやって、そのときに合わせるというか、子どもたちに合わせて（内容を）変えたりして、ゆるゆるとした感じでいいかなと思って、いつもやってます」と、日頃の保育の姿勢、子どもへの向き合い方について教えてもらうことができました。

体を動かしての遊びに皆で引き込まれ、誰もが、あっという間の40分間に感じられたようでした。また、会場は終始、熱気に包まれており、エアコンの温度を下げたが、熱気はなかなか冷めることはありませんでした。

その理由は、身体が感じる暑さのためだけではなく、保育への思いの熱さに包まれているからなのではと思いました。今回の、皆で体を使って遊ぶ体験では、熱い思いを共有することができたと感じます。すなわち、それは、それぞれの現場で皆が同じようにがんばっているということを体感したこととなり、今後、各参加者の心の支えのひとつとなると思われます。

最後に、先輩保育士たちから後輩に「楽しかったですね。保育士が楽しいって思えることがとても大事だと思います。これからも、子どもたちと一緒に、楽しいと思えることをいっぱいしてください。先生たちが楽しんでくださいね」とエールを送ってもらい終了しました。

⑤ おしゃべりタイム

先輩保育者２名がリードしながら、出された悩みや困りごとに親身になってみんなで聞いたり、自分の体験等から話をしたりしました。

Q 支援の必要な子どもがいるが、特別扱いと他児が思わないか心配。

A 車椅子の子どもがいた。他児は普通にドッジボールに誘う。普通に「今日入らないよ」と応えていた。疑問には持っているけれど、差別とは思っていない。子ども同士、あまり気にしていないことが分かった。

A ５歳児で椅子に座っていられない子どもがいた。３歳児からずっと一緒に過ごしてきているので、その子のことが分ってくる。３歳児のときは、「どうしてこの子だけこうしているんだろう」と疑問に思うかもしれないが、長い目で見ていけばきちんと分っていく。その間の保育者のその子の関わり方が他児のその子への見方になっていくことを考えて温かい思いで日々関わっていくことが大事かな。

Q 話が聞けず部屋を飛び出す。やらなければいけない活動をやらない。どうしたらいいか。

A 我が子もじっとしていられず、つい注意ばかり。上手に座っているときに褒めたり、面白おかしく言ってみたりなどすると少しずつ。すぐには無理だからね。

A もし私が担任だったら、その子といっぱい遊ぶ。その子の興味のあることをしてみる。絶対変わるから自信を持って。補助の先生がいるなら連携してその子との関わりをしっかりもてる時間をつくるといいかな。

A その子の興味のあるものが分からなければ、その子と同じ

事をしてみるのもいいかも。同じ言葉を使って同じように動いてみる。一緒に寝転んでみたら、その子が葉っぱのカサカサの音を楽しんでいたことが分かった。

Q 毎日クタクタで、週案・日案がしっかり書けない。クラスがこれでいいのか、不安になる。

A 分かる、分かる。何年経っても毎日クタクタ。自分は少しでも記録を書くようにしている。あの子はこうしていたな、何を用意しておいてあげよう、言葉かけはどうしよう、明日はこうしようなど次に向かっていける。周りに話せる先生はいるかな、もしいれば、自分のクラスについて聞いてみることもいい。今後どうしたらいいですか、とアドバイスをもらうといいかな。週案や日案も昨年度のものを見せてもらい、まずは、やってみる、そこから見えてくるものがあるかな。

様々に話が出されて、一緒にみんなで考えました。話をしていくうちに表情がほぐれ、聞いているうちに自分事として真剣に考える様子も見られ、親しい人が集まっている訳ではありませんが、だからこそ、気兼ねなく話せる良さもあるように感じました。気持ちがほっとして明日からの保育に頑張れる力が湧いてきたのではないかと皆さんの様子から感じとることができました。

セミナー終了後も、他のブースの遊びを体験したり久しぶりの友人と談笑したり、懐かしい先生方に現況を報告したりなどする姿も見られ、交流を深めていました。

参加者の笑顔から、明日からも頑張ろう！という思いで帰ってくれたのではないかと思っています。主催者にとって開催した喜びを噛みしめています。

来年度も、卒業した若手保育者がほっとした気持ちで集い、元気に職場で力を発揮し、楽しく子どもたちと過ごせるような機会にしていきたいと考えています。

各ブースの担当教員
①鬼頭弥生（名短保育科）　②嶌田弘子（名短保育科）　③田端智美（桜大国際教養こども学科）
④武藤直子（桜大保育学科）　⑤伊藤茂美（桜大保育学科）

参加者アンケート（抜粋）

- お世話になった先生に会えてうれしかったです。
- とても良かったです。また明日から頑張ろうと思えました。すぐに実践できるところが良かったです。
- このような機会はありがたいです。とても勉強になりました。楽しく良いリフレッシュになりました。
- 色々なお話やアドバイスが聞けて良かったです。
- 先輩のお話など聞けて保育頑張ろうと思えました。
- 久しぶりに同級生に会えてうれしかったです。

冬の講演会（報告）

障害の重い子どもたちのココロ
―特別支援学校小学部の実践から―

立命館大学 産業社会学部現代社会学科 教授　三木裕和氏

報告者：桜花学園大学　武藤直子

キーワード：特別支援学校小学部の実践　障害の重い子ども　子どもの心

冬の講演会は、「障害の重い子どもたちのココロ―特別支援学校小学部の実践から―」と題した三木裕和氏の講演を拝聴した。

三木氏は特別支援学校の教員として32年間勤務されたのちに、大学で教鞭をとっておられる。今回の講演では、その間に出会い関わられた子どもたちの中から３名に関するエピソードを中心として、特別支援学校に通う子どもたちの姿や教師が取り組む実践について語っていただいた。写真や動画を見ながら拝聴することで、その時そこで生きていた子どもたちや、その時そこで行われていた教育実践が目の前に現れてくるように感じられた。リアルな実践の話は心が揺さぶられ、教育者・保育者としての姿勢や子どもを捉える視点など教育の根幹について考えさせられる機会となった。

子どもたちとの関係において三木氏は「先生」であるので、以下は「三木先生」と記す。

１．Ｎちゃんと先生

Ｎちゃんは小学４年生の女児である。スクリーンに映し出されたＮちゃんと三木先生の写真が、二人が共に生きていたその時その空間を見せてくれる。Ｎちゃんは重症仮死で生まれ脳にダメージを受けたため運動発達が生後１、２か月くらいであり、首も座っていない。全身の緊張が強いため手などの変形もみられる。また、顔を合わせても視線がきっちりと合わないと相手には感じられるとのことを聞き、先生方はＮちゃんのふとした表情や目の動きからＮちゃんの目に映っているものや感じていることを捉えようとしてみえたことが分かった。

講演で写真を使用するにあたって、三木先生がＮちゃんの保護者に使用の許可依頼をされた。その際にお母さまが「どんな写真を使ってもらってもかまわないけど、かわいい顔の写真にしてね」とおっしゃられたとのこと。このユーモアのある返答と会話から、三木先生とＮちゃん、そしてＮちゃんの家族との心のつながりが分かる。写真には母親はじめ家族は写っていないが、Ｎちゃんを日々慈しみ育てておられたことや我が子を愛おしいと思う幸せ感をもってみえたことが写真の中のＮちゃんの姿から伝わってきた。

次の写真はＮちゃんのお泊まり行事のエピソードを映すものであった。お泊まり行事に関して事前にインターネット学習に取り組むなど、数日前から楽しみにしていたＮちゃん、毎日行く気満々で、その日はまだ行けないと分かると行きたくて泣いてしまうほどだったそうである。Ｎちゃんは、新しいことを知りたいという興味や関心、やってみたいという意欲を溢れるほどにたくさん持っている子どもであったことが分かる。

また、みわこ先生という大好きな先生とのエピソードから、Ｎちゃんは人との関わりにおいてもポジティブな気持ちを持っていたことが伝わってきた。Ｎちゃんは言葉でのやり取りとしてはできなくても記憶は残っていて分かっていることもあり、とくに大好きなみわこ先生とは分かり合うことが多々あったそうである。言葉のコミュニケーションは共感から生まれるということをＮちゃんが教えてくれている。

お泊まり行事では動物園に行ったそうである。柵の向こう側にいるダチョウが睨みつけてきたときに、Ｎちゃんは怖がるのではなく、睨み返していた。写真には睨み返すＮちゃんの姿があり、気持ちが強く逞しい一面を見せてくれていた。しかし、ウサギをお腹の上に乗せてもらったときの写真では、おっかなびっくりの表情であった。その表情について三木先生は、Ｎちゃんの心の中を興味半分、怖さ半分だと表現された。そして、人は自由度を高く持っていると逃げることができるが、肢体不自由児には自由度がなく逃げることができない。怖いものや見たくないものがあっても、そこから目を逸らすことすらも難しいことがあるのだと説明を加えられた。逃げるという行動は生命を保持するため、危険な状況から身の安全を守るために行う人間にとって必要不可欠な行為の一つであると言われている。しかし、身体を自由に動かすことができない場合は逃げることができない。怖い、逃げたいという意思を行動にうつせないことは恐怖心をより大きくするのではと想像する。自分の欲求や要求を自分で満たすことが困難であることや意思に逆らうように身体の自由度がないことがあることを私たちは感覚的に捉えきれていないのではないかと気付かされた。人は、内容や程度に差はあるものの何らかの意思を持つとき、それが思うようにできない、叶わないというジレンマを抱えることが少なからずあろう。子どもの心を分かろうとするときに、意思とそれに対する自由度という視点を持つことが必要であること、心に留めておくことの大切さを、このときのＮちゃんの表情とともに覚えておこうと思った。

続いて三木先生が「Ｎちゃんがこの後、笑顔になるんですよ、どうしてだと思いますか？」と問いかけられた。次の写真

に答があった。Nちゃんとみわこ先生が写っており「Nちゃんはみわこ先生で笑顔になるんです。Nちゃんにとって、みわこ先生は安心の基地、居場所、怖いときに帰れる場所なのです。いつでも帰っておいでと言ってもらえる。自分のことを何でも分かってくれる人なのです」と話された。そして「子どもは安全な環境の中でのスリルが好きなのです」と加えられ、お腹の上にウサギを乗せてもらったときの興味と恐怖の入り混じった気持ちが、みわこ先生という安心の基地に戻れたことで楽しいというポジティブな感情に変化したNちゃんの心の動きの意味が伝わってきた。みわこ先生という安心の基地に戻れたことで、怖いと感じたウサギにも意識を向けることができ、ウサギは怖いものではないのかもしれないという感覚をNちゃんは得たのではないだろうか。Nちゃんの笑顔には、怖さを克服した優越感や新しいものを知ることができた喜びの気持ちが表れていると感じた。

夜の花火の時間、Nちゃんはよく笑ったそうである。「ウシいたやんか、ウサギも……」と先生たちが話しかけるとNちゃんはその場面を思い出している様子だったそうである。教師ら周りの助けにより記憶をよみがえらせているのである。子どもと教師が一緒に何かを体験し共感することが、楽しい思い出としてその子の心の中に残っていることが分かる。それは発語としては表現されないが、心を通い合わせるというコミュニケーションが形成されていることからNちゃんの言語であると言えるのではないか。言葉に関して三木先生は加えて、田中昌人氏の「子どもが新しい言葉を使うのは夕方である」という知見を紹介された。子どもは一日の中でわくわくする経験をした後、夕方親しい人と出会い、この人なら分かってくれそうだと思ってしゃべる。そのようなときに子どもは新しい言葉を使うという言語獲得の内実があること、すなわち新たな言葉の獲得には、わくわくする経験と分かってくれる人の二つが必要であるのだと述べられた。それは、お泊り保育の夜の花火の時間に思い出を味わいながら楽しんでいるNちゃんの姿と重なる。安心の基地である先生がいて、その先生とのわくわくした体験と共感があったことにより、発語という形の言葉ではないが心の中の感覚的な言葉は生まれている、心の言語を獲得しているのである。

その後、Nちゃんは亡くなった。亡くなった日の夜、ご両親はNちゃんを病院から家まで車で連れ帰る途中、「この世でNが一番行きたいところはどこか？」と考え学校に寄られたそうである。Nちゃんにとっての、そしてご両親にとっての学校の存在の大きさを感じた。学校は知識やルールを学ぶだけの場所ではなく、生きる場所であり、Nちゃんの身体と心の居場所としてかけがえのない場所であったことが分かる。学校で過ごした日々はNちゃんの人生を幸せに彩ったのであろう。また、我が子の幸せな時間を感じて、ご両親も学校でのNちゃんの姿を心に刻まれていたのだと思う。ここで、冒頭の「かわいい写真にしてね」という母親の言葉から感じたNちゃんとご家族と三木先生の温かく太く深くつながっている関係性の所以が沁み入るように分かった気がした。Nちゃんは現世に物体として実在しないが、Nちゃんが紡いだ人との関係は今も存在していることを三木先生の思いの込められた言葉から強く実感した。

Nちゃんと会ったことも共に過ごしたこともない私たちが、この日、時をへだててNちゃんと出会うことができた。三木先生はNちゃんが亡くなった時「Nちゃんの分もがんばろう」と思われたと言われた。そのときから三木先生の中でNちゃんはずっと生きているのである。だから三木先生を通して私たちはNちゃんと出会うことができたのだ。三木先生の教育者として人としての子どもへの深い愛情に裏打ちされた話に心が震え、生命と生命が関わること、生命が生命の中で生き続けること、そして生命が生命をつないでいくことの尊さを感じるとともに「命の教育」の本質を教えていただいたと感じた。

2．特別支援学校における授業時の配慮

「自然」の授業、春に桜を見るという内容の場合、車いすに座った姿勢で見るだけではなく、必ず車いすから降りて桜を眺めることを取り入れられるそうである。子どもの目から桜はどのように見えるのかなど、子どもの目線を意識して指導案を作成される。また、花だけが桜ではないことを分かってもらうために葉桜を見に行く機会もつくられる。また雨の日を知ることで晴れの気持ちよさが分かることをねらいとして雨の日に外に出る活動を取り入れられ、「面白くなかった」と感じることを一つの経験として大事にされている。「見る、聞く、知る」の授業での人形劇鑑賞の場合、共同注視を意識して人形浄瑠璃を参考にされた。人形を演じる教師が人形を見ることで子どもたちの視線も人形に向くようにするというものである。これらの実践でされている子ども理解は、子どもを大人側

冬の講演会

から一括りに捉えるのではなく、子ども側から内面を捉えようとしている理解であることが分かる。ゆえに、個々の子どもに必要な援助や配慮、すなわち合理的配慮による教育が実践され、子どもの利益につながっているのだと考える。

3．多職種職場のメリット

特別支援学校では医療と教育の専門職が交わりながら、それぞれの専門性を生かして子どもたちに関わっておられる。教師が医療的ケアを実施したり、看護師が指導案を立案し教育を行ったりされている。教師は言葉掛けをし過ぎる傾向があるが、看護師は言葉が見つからず沈黙の間が生まれることがある。そのときに子どもが「あ……」「う……」と自発的に声を発することがあり、教師の気づきや見直しにつながることがあるそうである。また、実践後に指導案について経験の浅い人や看護師ら教師以外の職種の人の意見を聴くことによって新たな気付きが生まれることもあるそうである。このように、子どもに関わる全ての職員が互いに尊重し合い、主体的に共に教育の質をつくっている学校では子どもたちも安心して居心地よく過ごせるだろうと感じた。

4．責任の範囲、心配できる範囲

演題とは異なると前置きをされて障害の軽い小学１年生のＫちゃんの話をされた。Ｋちゃんは児童養護施設で暮らしていた。あるとき両親がＫちゃんを引き取ることを希望され、学校としても応援することとなったそうである。いよいよ引っ越しの日を迎え、お別れ会が開かれた。Ｋちゃんは「みなさん、ありがとうございました」と立派に挨拶をした。先生から「何がありがとうだった？」と尋ねられると「遊んでくれてありがとう」と答えたそうである。じゃんけんの理解ができたり、保育所時代に尿失禁をからかわれていたことに胸を痛めていたりと理解力も記憶力も持ち合わせているＫちゃんである。ゆえに「トイレくさい？」と何度も先生たちに確認していたそうである。そんなＫちゃんに職員からのお別れのプレゼントが渡された。座布団８枚と雑巾。尿失禁でＫちゃんが嫌な思いをしないようにとの思いが込められた贈り物だった。「みんななんで泣いてるの？」「さみしいからやんか」。このエピソードに、心が通うとはこういうことをいうのだと思った。人と心が通い合う経験を経たＫちゃんの心の中には人を信じることのできる力、基本的信頼感が培われたのだと思う。したがって、その先も家族や友達など周りの人たちとの信頼関係を築いていけるであろう。

三木先生はその後、Ｋちゃんの転校先の小学校の運動会を見に行かれた。かけっこに参加しているＫちゃんを見て三木先生は泣かれたそうである。心配と安堵の気持ちが入り混じった涙であったと推察する。三木先生はＫちゃんが自分を見つけたら動揺して運動会に集中できなくなるのではと心配され、目立たないようにこっそり見ておられたが、実はＫちゃんは三木先生のことを見つけていたそうである。Ｋちゃんは三木先生の思いを分かっていたのである。自分のことを心配してくれる人、自分の成長を喜んでくれる人が見ていてくれているとＫちゃんは分かっていたのだ。そのような存在があることはどれだけ心強いものであろう。離れていてもＫちゃんの心の中には三木先生がいるのである。

平仮名の習得などＫちゃんの成長を感じられたことも嬉しかったが、担任の先生に大事にされていることが伝わってきたことが何より嬉しいことだったと三木先生は話された。そして、子どもにとっては教師等の専門性云々ではなく、ましてやいい子だから愛されるということではなく、その子がそのまま愛されることが大事であると述べられた。その言葉を聞き、教育、保育現場で頻繁に使われている子ども主体という言葉を思い出した。子どもが主体として生きるためには、子どもを主体として尊重し、大切に関わる大人が必要である。ＮちゃんもＫちゃんも自分を愛してくれる大人が安心の基地として支えてくれていたから、自ら成長していったのである。そこには主体を支える者としての主体があった。人は人・物・事象と双方向に行き交いながら学ぶと言われることにも通ずる。主体同士の関係を伴いながら共主体として存在するところに教育・保育実践の本質があることを子どもたちと三木先生との実践に見ることができる。

そして、Ｋちゃんが大事にされていると感じられた時点で、そこから先の心配事に関わるのは自分の仕事ではないと考えたと話された。Ｋちゃんを大事に思い心配しながら関わってきたから心が通じ合う関係ができた。大事にされた子どもは人を信じることができるようになり、新しい環境で新たな人間関係をつくることができる。三木先生はＫちゃんと担任の先生の関係にそのことを感じ取られ、また、運動会でこっそり隠れている三木先生の気持ちを分かっていたＫちゃんに心の成長を感じられ、バトンを渡す時だと確信されたのだと思う。教師の仕事は子どものことを責任をもって心配することができること、人生

の中で自分が教師として触れ合う時間、心配できるときがあるのだということを述べられた三木先生の言葉は尊く、私たちが重く受け止めるべき言葉だと感じた。

5．共に主体として生きること

人は誰でも多かれ少なかれ様々なことを抱えながら生きている。外から見ると皆平気な顔をしているが内面はそうではないのではないかとお勤めされている大学での学生等と関わりを通して感じられるそうである。入学試験を乗り越えてきた学業において優秀な学生が障害児や障害者等の人たちについての理解ができるか心配されていたが、そうではなかったという話から始められた。

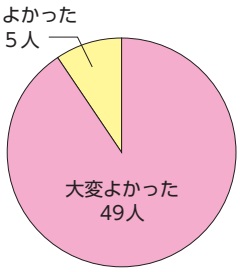
障害児通園施設で卒業研究を行っていたＫ子さんの話をされた。Ｋ子さんは大学４年生の途中で留まっていたので、８年生になっての卒業研究であった。Ｋ子さんは研究対象として、壁に向かってよだれをたらし、ずっと積み木をかじっているというＲちゃんという子どもを選んだ。三木先生はＫ子さんもＲちゃんも社交性があるとは言えない地味だと言われるタイプであることと、Ｒちゃんを選んだＫ子さんを見る目が高いと思われたことを話された。

ある日、Ｋ子さんは施設の職員から「Ｒちゃんをトイレに連れてって」と頼まれた。そのときのことを振り返り、三木先生にこう言ったそうである。「私は一線を越えそうになった。トイレに連れていくのはＲちゃんのためではなく（頼まれたことをしなかったと）自分が叱られると嫌だから連れて行こうとした」。Ｋ子さんは教育・保育は子どものために行うものであるという基本から外れそうになったことに気付き、自らを省みて実直に子どもと向き合おうとしていたのである。Ｋ子さんの言葉には教育者の勇気と誇りを感じた。そして、自分の心には子どものためではないバイアスがかかるという陥穽が潜むことを自覚しなければと思った。

卒業研究発表会でＫ子さんは「１年間Ｒちゃんと関わりひとつ分かったことがあります。私も生きていていいと思ったことです」と述べたそうである。卒業研究を通してＫ子さんが自身で掴んだ解である。その後、Ｋ子さんは特別支援学校の教師になった。三木先生は、教育者、保育者は障害のある人に対して支援をする側にいるようだけれど、助けられることがいっぱいある、Ｋ子さんの人生を助けてくれたのはＲちゃんであると話された。

三木先生が話された３人の子どもたちとの話に共通して、子どもと大人（教育者）が共に生きることの素晴らしさを感じた。教育・保育実践とは教育者や保育者が一方向的に行うものではなく子どもと共につくるものであることを示していただき、再確認することができた。子どもと大人、子どもと子ども、大人と大人それぞれが互いを大切に思いながら応答的に関わり、共主体として生きるところに真の教育・保育が存在することを示唆いただいたと感じる。

当日の参加者は89名でアンケートの回答者数は54名であった。４件法でアンケートをお願いした結果からも大変好評であったことが示された。



参加者の感想から４件抜粋

- 事例を踏まえて話してくださって、具体的な姿が分かり、とても分かりやすかったです。今保育園で支援の担当をしていますが、明日からまた子どもと向き合う元気をもらえました。
- 自分自身の教員時代を振り返り、重ねつつ、先生のお話を拝聴しました。本当に子どもとの出会いで自分が生きていてよかった、生かされていると感じることはあるので、色々な場所で子どもと関わる人が心を重ね繋がっていくことが、世界を広げていくことになるのでは…と様々に心を巡らせました。ありがとうございました。
- 難しい座学だけではなく、実際の経験を混じえた講演会だったので学生の私にとってはとても記憶に残りやすかった。
- 三木先生のお言葉の節々から、子どもへの想いが溢れていてとても胸が熱くなりました。また写真を見ながら語っていただくというスタイルは初めてでしたが、三木先生のお人柄が滲み出るトークと相まって学びと児童生徒と関わる上での姿勢を改めて正そうと感じる貴重なご講演でした。ありがとうございました。

参加者の感想からも心に響く講演であったことが分かる。三木氏は子どもと教育実践への思いをユーモアたっぷりに分かりやすく話してくださり、参加者は笑ったり泣いたりしながら心で聴くことができた講演であった。

子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのアンケート

子育て支援室には対象年齢を決めた交流会と、どの年齢の子も参加できる開放日があります。

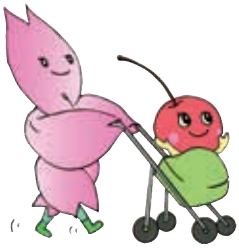
今回は１か月程の期間にアンケート用紙を配布し、保護者の方にお子さんの様子や利用された感想などを記入していただきました（次回の来室に持参）。32名の保護者にご協力いただきました。皆さま、ありがとうございました。

Q 日頃はどのような遊びをしていますか？

- 家では、絵本、ままごと、お絵描き、プラレール、ブロック、積み木、電車・車のおもちゃ、人形遊び、シール貼り、など。
- 外では、公園の遊具、お散歩、ボール遊び、砂遊び、三輪車、など。

Q 支援室に来られたきっかけは？

- 友人の紹介、口コミ。
- 付属幼稚園の入園を希望しているため。
- インターネットで見つけたので。
- 豊明市の広報を見て。
- 上の子が通っていたので（その時は知人から聞いて）。
- 卒業生で大学に来たついでに寄ったらとても良かった。
- 名短出身のため支援室があることを知っていた。
- 大学の HP を見て。
- 「さくらもち」で知った。
- 栄のキッズステーションのスタッフにすすめられた。
- 緑区のお知らせを見た。
- 他の保護者とお話してみたかったから。
- 同年齢の子どもと遊ばせたいと思ったから。
- 健診のときに支援センターに連れて行って遊ばせると良いと言われ調べた。



Q 支援室の良さはどんなところ？

- 保育士さんが常駐しているので、自分が少し息抜きでき、安心・安全に遊べる。
- 先生の親しみやすさ、子どもへの接し方。
- 環境の雰囲気が良く、家にはない刺激がある。
- 自分の気分転換になる。
- 付属幼稚園の送迎のついでに遊びに行ける。
- 年齢に合った交流会。
- 年上のお子さんと遊べる。
- 先生がたくさん声をかけてくれる。
- 気軽に人に会える。
- おもちゃがたくさんあり、手作りおもちゃがある。
- 先生が子どもとたくさん遊んでくれる。
- いろんな遊びができる。
- 部屋の中に子ども用のトイレがある。
- 短大の中にあり、学生さんにたくさん遊んでもらえる。
- いろいろなことを相談できる。
- 先生や他の保護者と情報交換できる。
- 図書館が利用でき、知識も増やせる。

Q 支援室をきっかけに保護者の方同士のつながりはできましたか？

- 32名中、21名の方が概ねできた、付属幼稚園での保護者や、近所のママと支援室をきっかけに知り合いになれて良かった、というご回答でした。
- 他方、11名の方は、まだ他の保護者とほとんど話すことができていない、挨拶する程度、というご回答でした。

Q 支援室を利用された感想は？

- 気候や天気を気にせずに来れるので良いです。
- 私が相談できる場として助かります。
- スタッフや先生方が優しく、子どもも楽しそうです。
- 安心して遊ばせることができるので、これからも通いたいと思います。
- 普段、出かける場所が少ないので助かっています。
- 大学のお姉さんと触れ合え、楽しんで利用させてもらっています。

- 学生さんとの交流があるのもとても良いです。
- 交流会の日はいろんな遊びを知ることができるので子どもがより楽しそうです。
- 絵本や家にないおもちゃがたくさんあって良いです。
- 手作りおもちゃがたくさんあって、先生方があったかいし、勉強になります。
- 先生方もたくさん声を掛けてくれるので親子共に過ごしやすいです。
- 育児相談にのっていただけるのですごく助けられています。
- 家とは違った子どもの様子が見れたり、他のお子さんとの関わりが見れたりして楽しいです。
- いつもあたたかく受け入れてくれるので行きやすいです。
- 行くと、子は刺激を受け、親はリフレッシュでき、とても良い時間を過ごせます。
- 図書館も利用できるので助かっています。
- 親子共に、友だちができて満足です。

Q 学生との交流の感想は？

- 子どもが緊張してなかなか学生さんと遊べなかったが、母は楽しかったし、普段できない交流ができて良いです。
- 子どものために、素敵なアイディアで作ったおもちゃや手遊びなど用意してくださっていつも感謝しています。
- 積極的に声を掛けてくれて、たくさんの人と関われるのは良かったです。
- 学生さんがドキドキしながら発表し、可愛がってくれている様子は、見ていてほっこりします。これからもたくさん交流して欲しいです。
- 学食などでも相手をしてもらえ、嬉しそうです。
- 型にはまらず、これからも頑張ってほしいです。
- 学生さんが一生懸命に子どもと遊んだり、関わろうとしてくれたりして、子どもも喜んでいます。
- 子どもが学生とだんだん打ち解けていく過程をみていてほほえましいので、学生さんたちの力になれるのなら、いくらでも交流の機会を、と思います。

引き続き、感染症対策を講じながら開放日は予約なしで開催となりました。多くの親子の皆さんに利用していただくことができました。また、今年度は対面で学生との交流も盛んに行うことができました。今後も「さくらんぼ」が、利用する皆さんにとって、安心して過ごせる場になるよう心がけていきます。　（文責 鬼頭弥生）

■ 2023年度 子育て交流会、支援室開放日参加者数

2024/3/8 現在

	交流会／回	子ども	大　人	開放日／回	子ども	大　人
4 月	9	55	40	6	48	40
5 月	12	59	46	8	71	61
6 月	13	55	45	9	83	74
7 月	6	37	37	4	24	22
9 月	13	47	42	7	76	64
10 月	12	60	47	8	82	70
11 月	10	62	48	7	80	74
12 月	7	44	35	4	47	41
1 月	10	70	52	6	75	66
2 月	10	72	54	7	109	91
3 月	4	41	31	2	34	28
計	106	602	477	68	729	631

大学における子育て支援室の役割

嶌田弘子（名古屋短期大学保育科）　田端智美（桜花学園大学国際教養こども学科）
近藤　愛（子育て支援室さくらんぼ保育士）

キャンパスにおける子育て支援室の役割

キャンパス内にある子育て支援室「さくらんぼ」（以下、支援室という）では、年間を通して多くの親子の利用があります。ただ、ここにきて遊ぶだけでなく、支援室の保育士との話を楽しんだり、お母さん同士で子育ての情報交換をしたり、大人も子どもも楽しく過ごすことができる場所になっています。また、本学の学生は、この支援室において、子育て支援を体験的に学ぶ機会を得ています。今年度は、名古屋短期大学１年生はゼミごとに１回、交流会に参加し、桜花学園大学保育学部保育学科及び国際こども学科の学生もゼミごとに参加しています（表１参照）。

ほんの短い時間ではありますが、学生にとっては、子どもだけでなく保護者の方がいるということに大きな意味のある経験となっています。昨今、保護者対応の難しさに悩む保育者は少なくありません。保育者養成において、キャンパス内に支援室を設置していることは、学生が、実習以外に子どもや保護者に関わることができる環境として大きな意味があると言えるのではないでしょうか。

学生による交流会の親子の姿から

今年度も、多くの親子に交流会に参加していただきました（表１）。同学年の子どもが集まることもあり、子どもも保護者も自然とコミュニケーションがとれ、和やかな雰囲気で過ごしています。特にゼミごとの交流会では、元気いっぱいでやさしい声の学生に子どもも惹きつけられ、子どもの目がキラキラと輝いて見えました。子どもは、学生の姿を真似てみたり、じっと見たり、その様子を横で微笑ましく見守る保護者もいい笑顔がみられました。学生の交流会は学生にとっても、親子にとっても有意義な時間であると感じています。

交流会の準備

交流会の参加はゼミ単位で行っています。学生の代表者が事前の打ち合わせを行うことになっています。きちんと挨拶をして計画書を提出しています。交流会に向けて、自分たちで内容を決め、練習をしてくることでしょう。ゼミ内で３～４のグループに分かれ、手遊びや体操、絵本の読み聞かせなどを披露しています。今年度は、入学して間もない１年生も子どもたちとの関わりを楽しいものになるようにアイデアを凝らしたゼミが多いと感じました。

交流会を通して学生に期待すること

子どもたちは、普段、見慣れないたくさんの学生を前にはじめはびっくりしている様子も見られますが、お互いに緊張しているものの、学生の元気な声が、会をリードしてくれ子どもたちも集中して参加していました。学生たちは、手遊びや親子ふれあい遊び、ゲーム、絵本、体操等、子どもたちの年齢や発達を考え、計画し、３～４人のグループごとに役割を分担してい

表１　2023年度　さくらんぼ支援室交流会等実施状況

日時	ゼミ名	参加人数	内　容	日時	ゼミ名	参加人数	内　容
5月10日	近藤ゼミ	14	手あそび･絵本の読み聞かせ･ミニゲーム	6月21日	堀ゼミ	8	手あそび・体操・ゲーム・ダンス
5月24日	高須ゼミ	13	歌・じゃんけん列車・折り紙	9月28日	藤井ゼミ	20	絵本読み聞かせ
6月　7日	新沼ゼミ	12	手あそび・大型絵本	10月　5日	武藤ゼミ	15	ふれあい遊び
7月　5日	小柳ゼミ	13	手あそび・絵本	10月12日	田端ゼミ	9	ふれあい遊び
7月12日	小川ゼミ	14	大型絵本・手あそび	10月19日	田端ゼミ	14	ふれあい遊び
10月　4日	上原ゼミ	13	手あそび・歌・体操	10月26日	武藤ゼミ	4	ふれあい遊び
10月11日	山下ゼミ	13	音楽あそび・新聞あそび	11月　9日	嶋守ゼミ	7	絵本・手あそび
10月18日	杉山ゼミ	13	手あそび・大型絵本	11月16日	嶋守ゼミ	6	ふれあい遊び
11月　8日	嶌田ゼミ	12	手あそび･親子ふれあいあそび･絵本･体操	11月30日	松永ゼミ	20	手あそび
11月22日	高野ゼミ	13	親子ふれあい遊び・ゲーム・手あそび	12月14日	嶋守ゼミ	7	絵本・ふれあい遊び
12月　6日	鬼頭ゼミ	13	絵本・親子ふれあいあそび・手あそび				
1月17日	太田ゼミ	13	手あそび・絵本				

ます。支援室のスタッフの援助はほとんど必要なく学生たちで進められる会となりました。交流会後の学生の様子は、支援室に入ってきた時とは違い、その表情から充実感が感じられます。学生には、上手にやろうということより、まずは、自分自身が楽しんで参加することが一番大切であることを伝えたいと思います。支援室での経験が、次回の保育活動の一助になることを期待しています。

学生の感想から

Q 子育て交流会に参加してどのような経験をすることができましたか？

- 初めて子どもたちの前で手遊びをしました。初めてのことであったため、不安や緊張がとても強く、たくさん準備や練習をしましたが、自分の担当の時間になると、さらに緊張が増し言いたいことを忘れかけてしまうほどでした。しかし、始まると「楽しい」という気持ちが大きくなり、最後までやりきることができました。また、子どもたちと向かい合って遊ぶ楽しさを実感しました。さらに、保育園や幼稚園とは違って、子どもと保護者が一緒に来て楽しめたり、保護者同士の交流ができたりする場があるということを知ることができました。
- 保護者と子ども、保育者と子どもと関わる様子を見ることができました。また、体操をしたのですが、ただ自分が踊って見せるだけでなく「まわるよ～」「手は上でキラキラだよ」など、声をかけることの必要性を学びました。絵本では、絵本しか見ずに読み聞かせをすると、子どもの気持ちがそれてしまうことがあるので、絵本を読みながら、子どもたちの顔をみたり、絵本に指をさしたりしながら読むことが大切だと感じました。
- 実際に子どもたちの前に立って、絵本や手遊びをするというとても貴重な経験をすることができました。１歳の子どもたちは、本当に自由で、座ってみている子もいれば、走り回っている子や寝そべって聞いている子もいて、この先、自分が保育者になったらこのような状況でどう対応していくのか、また、そのために自分がどう学生のうちに成長することができるのか、何をすべきか考えるきっかけになりました。
- 実際に子どもと遊ぶことによって得られる楽しさがあって、「保育ってやっぱり良い仕事だ」と実感することができました。また、保育士の方の絵本の読み方が、自分たちと全然違っていて、まだまだ、改善できることが多いと感じ勉強になりました。

子育て支援室における交流会の意義

学生のアンケートから、交流会に参加することで得られる子どもへの関わり方の気づきや今後の自身の学びへの意欲、さらには保育職へのやりがいを感じていることがわかります。交流会は、時間的には20～30分ほどですが、実際に低年齢児に触れたことのない学生にとって、子どもの様子から子どもの発達に気づたり、関わり方を学んだりすることができます。また、支援室の保育者の関わり方や声掛けを実際に見ることでの学びや保護者と子どもの関わりを知る機会として有効な機会となっています。

今後も子育て支援室での交流会を通して、まさに共主体として学生、来室する親子そして、そこにいる保育士にとって豊かな経験となる機会と捉え、活動していきたいと考えています。

豊明市子育て支援センターたけのこ交流会への学生参加

豊明市と桜花学園大学・名古屋短期大学は2022年に包括協定を結びました。それに伴い、豊明市子育て支援センターたけのことの交流が実施されるようになり、2023年には、学生参加の交流会を４回実施しました。参加人数は40名です。前記の支援室は、大学内の支援室ですが、豊明市子育て支援センターたけのこは、豊明市が実施する子育て支援です。学生は、市が行う支援について実践的に学ぶことができました。

表２　2023年度 豊明市子育て支援センター
たけのこ交流会参加実施状況

日時	ゼミ名	参加人数	内　容
6月 7日	寺田ゼミ２年	8	身体を使って遊ぼう（フラフープ通り・玉入れ・ボーリングなど）
6月28日	堀ゼミ２年	16	人形劇とふれあい遊び（オリジナル人形劇「遠足」・リズム遊びなど）
7月 5日	基村ゼミ２年	10	ふれあい遊び（ミッキーマウスマーチ・はらぺこあおむしの大型絵本など）
11月 1日	藤井ゼミ３年	6	リズムに合わせて体を動かそう（大型絵本・ダンス・バスごっこなど）

たけのこ交流会を通して学生に期待すること

例年の学生は、１年次のゼミで支援室を訪問し、子育て支援の実際について学びます。しかし本年度の２年生の学生は、コロナ禍のため、子ども・保護者とオンラインでつながることで子育て支援を学びました。よって早く保護者や子どもと、対面で関わりたいという気持ちを強く持っていたと感じました。意欲的に活動の内容について吟味し、子どもが楽しむことができる内容を考える姿が見られました。後述の学生の感想から見られるように充実した学びが確認できました。

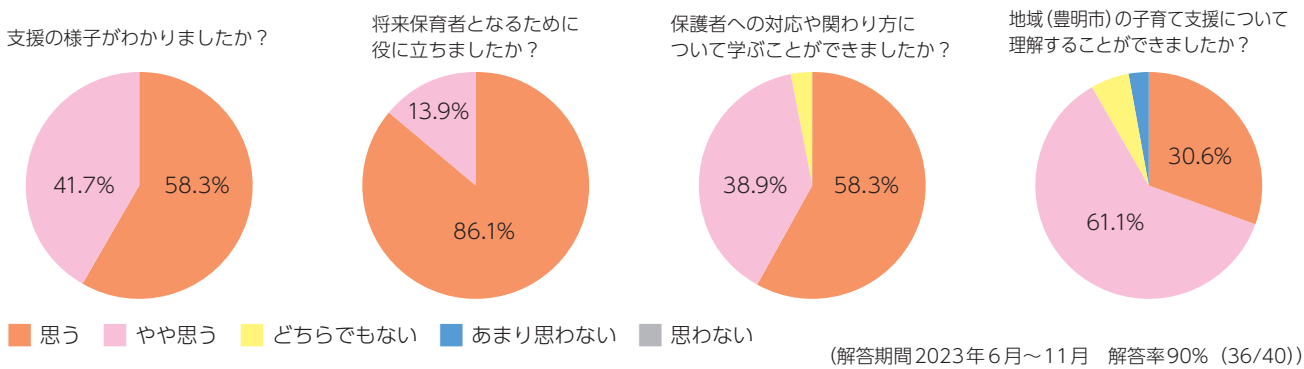
学生の感想から

- 1、2歳児の子どもたちとの遊び方、触れ合い方、保護者の方との関わり方がよくわかりました。
- 話のスピードをゆっくりにすることで乳児と目が合うことができたし、一点を見つめて話すのではなく、周りを見て話を伝える気持ちで話すと保護者の方々も頷いてくれることが分かりました。
- 保護者の方から子育てで困っていることなどを実際に生で聞くことができ、どのような支援を必要としてるのかを考えさせられました。
- 子どもが夢中になれる劇や歌の工夫を考え、実際にやってみることができました。大まかな流れを計画したあと、練習をしてみて気づいたことを改善していくことの難しさを知ることができました。人形を使って話しかけることで子どもの緊張が和らぎ、興味を持ってもらうことができました。
- 豊明市の子育て支援センターの方の助言で、保護者の方とのコミュニケーションの取り方や、異年齢児が同じ空間にいるときの気をつける点などを実感することができました。
- 練習時には興味を持ってくれるのか、楽しんでくれるのか不安でしたが、実際は子ども自ら寄ってきたり、笑顔の様子を見て、手作りで製作したものがこんなに楽しんでもらえるのだと嬉しかったです。子どもの前で披露することや保護者の方と深く話すことが少ないので、普段のお子さんの様子を聞きながら助言をするという難しさを経験出来ました。

たけのこ交流会の意義

学生のアンケート（図１）から、交流会に参加することで歌や遊びの活動や、子ども・保護者との関わりを通して、乳幼児の理解を深めることができました。特に就園前の子どもの姿を確認できたことは学生にとって有意義な時間になりました。また、学生は市が行う子育て支援について、たけのこがセンター的な役割していることも確認でき、自治体が一丸となって子育て支援をおこなっていることが確認できたと考えます。

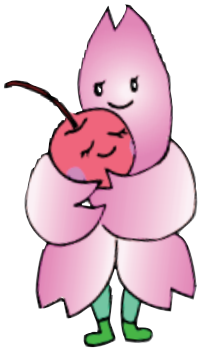
図１　たけのこ交流会参加学生のアンケート結果



（解答期間2023年６月～11月　解答率90%（36/40））

2024年度事業計画

チャイルドエデュケア研究所では、2024年度は、「共生社会を担う子どもの育ちのために」をテーマに、地域の保育者や子育て家庭、学生、卒業生と共に学ぶセミナーや講演会等を開催します。また、地域とのつながりを大切にした様々な事業を提供できるよう、地域で活躍されている子育て支援のNPO団体等の皆さんと連携し、子育てに関する支援を行い、交流を深めていきたいと考えています。子育て支援室「さくらんぼ」での子育て交流会や学生との交流も、徹底した感染症対策を講じながら実施いたします。



夏季保育セミナー

■テーマ：「仮：遊びを一緒に楽しもう！
——明日から使える保育実践」
■日　時：2024年7月7日(日) 13:30～15:00
■場　所：桜花学園大学・名古屋短期大学

冬の講演会

■講　演：谷島直樹先生
■演　題：「心の窓を開いて、世界を広げよう
——ニュージーランドから学んだ、大人と子どもの共生の輪と多文化理解」
■日　時：2024年10月27日(日) 14:00～15:30
■場　所：桜花学園大学・名古屋短期大学
8号館　さくら講堂

編集後記

「チャイルドエデュケア研究所年報」第21号をここにお届けします。今年度は、夏季保育セミナー、冬の講演会ともに、感染症対策を行い対面での開催となり多くの方々にご参加いただきました。本年報は、今年度のテーマ「共主体が育まれる保育—全ての子どもたちの幸せのために—」に沿った内容で、ご講演、ご寄稿いただきました。また、研究所が主催する夏季保育セミナー及び冬の講演会、また子育て交流会等の報告等の研修・事業報告、桜花学園大学保育学部や名古屋短期大学保育科の教員による研究・実践報告を収めています。

本年報が、本研究所の取り組みをご理解いただき、これからの保育・教育・子育てについて子育て家庭の皆様、そして地域の皆様と共に考えるきっかけになることを願っています。

【2023年度　研究所役員体制】

●所　　長	田端智美	●主任研究員	伊藤茂美
●副 所 長	嶌田弘子		武藤直子
●事務局員	佐藤多美江		鬼頭弥生

表紙デザイン

名古屋短期大学保育科専攻科２年授業作品

チャイルドエデュケア研究所 年報 21号 2023

発行 **桜花学園大学・名古屋短期大学**

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武侍48
名古屋短期大学　TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162
桜花学園大学　TEL.0562-97-5503 FAX.0562-98-1162
2024年３月31日発行